

2023年度 JICA
教師海外研修
(教育行政コース)
報告書



目次

I	事業概要	・04
II	参加者・運営関係者	・07
III	研修スケジュール	・09
IV	海外研修視察レポート	・18
V	参加者レポート	・33
VI	ファシリテーター所感	・63
VII	付録	・66

1. 背景

国際協力機構（JICA）は日本の政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関であり、約150の国・地域で国際協力を展開している。日本国内においては、これら国際協力を通じて得た知見を生かし、「持続可能な社会の創り手」の育成を目指す新学習指導要領などの学校教育の動向を踏まえ、「教師海外研修」「国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」「施設訪問」「国際協力出前講座」「開発教育メールマガジン」「開発教育教材作成」など、国際理解教育/開発教育を支援する様々な事業を行っている。

本研修は上記開発教育支援事業の一環として、全国の国際理解教育/開発教育に携わる学校管理職（校長・教頭）および教育行政関係者を対象に実施するものである。学校全体で開発教育の継続的な取り組みを実施するためのスクールリーダーの能力強化を目的としている。

2. 目的

誰もが安心して暮らせる「だれ一人取り残さない」社会づくりに関わる問題は、世界でも、地域でも、そして学校でも共通する課題である。

本研修は、このような背景を踏まえ、学習指導要領の「持続可能な社会の創り手」の育成も念頭に、参加者は開発途上国の現状や国際協力の現状について、実際に途上国を訪問しJICAが実施している教育支援について体験し考える。また、参加者同士の意見交換や知見の共有を通して、スクールリーダーとしての力を高めることをねらいとしている。さらに、参加者が研修終了後も継続して、本研修で培われた教員ネットワークで情報を共有することで、各地域の学校教育関係者と共にさらなる国際理解教育/開発教育の推進を図ることを目指している。

3. 研修日程・会場

事前研修	2023年10月20日（金） 10:00-18:00	会場：JICA本部（麹町）
海外研修	2023年12月24日（日）～12月30日（土）6泊7日	派遣国：カンボジア王国
事後研修	2024年1月12日（金） 10:00-18:00	会場：JICA市ヶ谷ビル
報告会	2024年1月24日（水） 17:00-18:30	オンライン

4. 主な内容

事前研修

- 研修の目的とプログラム全体の流れ
- 国際理解教育/開発教育推進について
- 研修テーマの共有
- 国際協力の現状と課題
- 派遣国事情、渡航について など

海外研修

- JICAカンボジア事務所訪問、スタッフとの意見交換
- JICAのカンボジアにおける国際協力現場（主に教育分野）の視察
- 現地学校関係者等との意見交換
- 現地で活動するJICAボランティアとの交流
- 振り返り など

事後研修

- 研修レポートの共有
- 海外研修の振り返り
- 昨年度参加者の事例紹介
- 報告会に向けての準備

報告会

- 海外研修の経験、知見の共有
- 国際理解教育/開発教育の推進について

5. 実施体制

- 主催 : 独立行政法人 国際協力機構（JICA）広報部地球ひろば推進課
- 運営事務局 : 一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）
（JICA地球ひろば・教員向け研修運営事務局）

6. 参加資格

以下の①または②に該当するとともに、③～⑥を満たす方。

- ①小・中・高校、特別支援学校等の校長・教頭職の方。（主幹教諭を含む）
- ②都道府県・市町村の教育委員会（教育センターを含む）の指導主事の方。
- ③本研修の趣旨・目的を十分理解し、上記研修プログラムに参加可能であること。
- ④オンライン会議ツール（Zoomを想定）を用いた研修実施に対応可能であること（Wi-Fi環境、PCなど）。
- ⑤本研修を通じて得られた学び・成果を所属先及び各地域の教育委員会、各種教員ネットワーク（研究会、勉強会等）の場において積極的に共有・紹介する意欲のあること。
- ⑥JICA国内拠点や各県所在のJICAデスク（国際協力推進員）等と連携・協力しながら、開発教育/国際理解教育の普及促進に貢献する意欲があること。

II

参加者・
運営関係者

参加者(9名)

都道府県	名前	現所属	職名
青森県	神田 昌彦	弘前市立南中学校	校長
福井県	三宅 育代	美浜町立美浜東小学校	教頭
群馬県	田崎 潤	群馬県立前橋西高等学校	教頭
千葉県	多田 幸城	千葉市教育委員会 学校教育部教育指導課	指導主事
長野県	徳永 佳代	長野県松本県ヶ丘高等学校	校長
大阪府	川本 重樹	能勢町教育委員会 学校教育総務課	指導主事
兵庫県	告野 さつき	神戸市教育委員会 神戸市総合教育センター	指導主事
和歌山県	藤田 万愉子	田辺市立上芳養中学校	教頭
広島県	藤田 有記	東広島市立木谷小学校	教頭

主催 独立行政法人 国際協力機構(JICA)

名前	職名
竹田 幸子	JICA広報部長・JICA地球ひろば 所長
畔上 智洋*	JICA広報部 地球ひろば推進課 課長
加藤 眞佐美	JICA広報部 地球ひろば推進課
井戸 奈央	JICA広報部 地球ひろば推進課
諸橋 郁哉*	JICA東京 市民参加協力第一課 学校教育アドバイザー
小川 紀子	JICAカンボジア事務所

*海外研修同行者

運営事務局 一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト(GiFT)

名前	職名
木村 大輔*	理事・GiFTダイバーシティファシリテーター
忍 頼子	グローバル教育プロデューサー
岩崎 沙織	グローバル教育コーディネーター

*海外研修同行者



研修スケジュール

(1) 事前研修 2023年10月20日(金) 10:00-18:00 会場: JICA本部(麹町)

開始	終了	プログラム	担当等
9:30	10:00	受付	運営事務局
10:00	10:15	【開会】主催挨拶	JICA広報部長 竹田 幸子
10:15	10:40	教師海外研修とは 事前研修のねらい	JICA地球ひろば推進課 課長 畔上 智洋
10:40	11:20	【アイスブレイク】 自己紹介(チェックイン)	ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
11:20	11:30	休憩	
11:30	12:40	【ワークショップ】ストーリー・テリング	ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
12:40	13:20	昼食	
13:20	14:15	【ダイアログ】 今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する 意味や重要性とは何か	ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
14:15	14:20	休憩	
14:20	14:40	【説明】 海外研修についての説明(安全管理含む)	JICA地球ひろば推進課 加藤 眞佐美 GiFT 忍 頼子
14:40	15:00	【ダイアログ】 カンボジアにおけるJICAの取り組みについて考える	ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
15:00	15:10	休憩	
15:10	16:10	【講義】 カンボジアにおけるJICAの取り組み(教育関係)	JICA人間開発部基礎第1チーム ジュニア専門員 山上 莉奈
16:10	16:20	休憩	
16:20	17:00	講義振り返り	ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
17:00	17:30	【ダイアログ】 ・国際理解教育の推進者として現場にどう還元したい か? ・次の世代にバトンを渡すなら、どうやってつないで いけるか?	ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
17:30	17:35	休憩	
17:35	17:45	質疑応答 事務連絡	JICA地球ひろば推進課 加藤 眞佐美 GiFT 忍 頼子
17:45	17:55	1日の振り返り(チェックアウト)	ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
17:55	18:00	【閉会】主催挨拶	JICA地球ひろば推進課 課長 畔上 智洋



【ダイアログ】今、この時代に、
国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性とは何か



【ダイアログ】ODAマップを見ながら
JICAのカンボジアにおける取り組みについて考える



【ダイアログ】
国際理解教育の推進者として現場にどう還元したいか



集合写真

講義 2023年11月1日(水) オンライン

開始	終了	プログラム	担当等
14:00	15:00	JICAの対カンボジア支援の概要	JICA東南アジア・大洋州部 東南アジア第二課 鈴木 雅弘 清水 翔太

出発前オリエンテーション 2023年12月4日(月) オンライン

開始	終了	プログラム	担当等
17:00	18:00	・海外研修のスケジュール ・発表について ・訪問の記録について ・安全管理・緊急連絡体制について ・質疑応答 等	JICA地球ひろば推進課 加藤 眞佐美 GiFT 忍 頼子 JICAカンボジア事務所 小川 紀子

(2) 海外研修 2023年12月24日(日)～12月30日(土) 6泊7日 派遣国:カンボジア王国

【Day 1】 12月24日(日)

11:30	成田空港集合
14:00	仁川国際空港へ向けて出発(大韓航空 KE704)
16:50/18:55	仁川国際空港着/発(大韓航空 KE689)
23:00	プノンベン国際空港着、ホテルへ移動、チェックイン

【Day 2】 12月25日(月)

10:00	JICAカンボジア事務所訪問
12:00	昼食
13:30	【JICA民間連携事業視察】 アプリ教材「Think!Think!」の活用による初等教育のSTEM学力向上に関わる普及・実証・ビジネス化 事業(説明)
14:45	ノロドム小学校訪問 デジタルラーニングセンター視察
19:00	夕食&1日の振り返り

【Day 3】 12月26日(火)

10:00	【JICA技術協力事業視察】教員養成大学訪問 プロジェクト専門家からの説明 ・JICA専門家教育政策アドバイザー:松田 徳子氏
12:00	プノンベンからスバイリエンに向けて移動 つばさ橋見学(無償資金協力)
16:00	【JICA海外協力隊活動視察】スバイリエン中高等学校訪問 ・青年海外協力隊(サッカー):増澤 尚享氏
19:00	夕食&1日の振り返り

【Day 4】 12月27日(水)

8:00	【JICA海外協力隊活動視察】スバイリエン中高等学校訪問 ・青年海外協力隊(体育):高木 大作氏
11:00	ホテルチェックアウト、昼食
13:30	【JICA海外協力隊活動視察】スバイリエン中高等学校訪問 ・青年海外協力隊(小学校教育):目黒 友佳子氏
15:00-18:00	スバイリエンからプノンベン(JICAカンボジア事務所)へ移動
18:00	海外研修(前半)の振り返り
19:00-20:30	ホテルチェックイン、夕食

【Day 5】 12月28日(木)

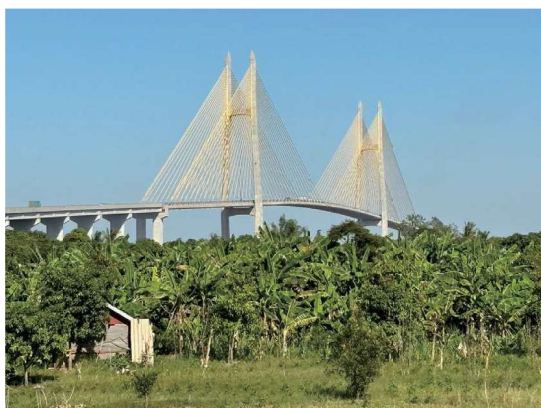
8:00	【JICA草の根技術協力事業視察】オリンピックスタジアム訪問 小学校から高等学校まで一貫した高い質で学ぶ「Physical Education for All」プロジェクト
11:00	イオンモール3へ移動、昼食
14:00	【民間プロジェクト視察】イオンモール3訪問 SDGs×アート・デザインで世界を変える! (Social Compassプロジェクト)
19:00	夕食&1日の振り返り

【Day 6】 12月29日(金)

8:00	【JICA水道事業の協力(プノンベンの奇跡) 視察】 JICAカンボジア事務所にて水道事業概要説明
10:00	プノンベン水道公社訪問および水道施設視察
11:00	昼食
12:00	海外研修の振り返り(JICAカンボジア事務所)
14:00	プノンベン市内視察
18:30	プノンベン国際空港へ移動、チェックイン

【Day 7】 12月30日(土)

0:20	仁川国際空港へ向けて出発(大韓航空 KE690)
6:45/9:55	仁川国際空港着/発(大韓航空 KE703)
12:20	成田空港到着→検疫・入管・税関→解散



メコン川にかかるつばさ橋(ネアックルン橋)



スパイリエンヌワット小学校の生徒とともに

(3) 事後研修 2024年1月12日(金) 10:00-18:00 会場: JICA市ヶ谷ビル

開始	終了	プログラム	担当等
9:30	10:00	受付	運営事務局
10:00	10:10	【開会】主催挨拶	JICA地球ひろば推進課 課長 畔上 智洋
10:15	10:40	【アイスブレイク】 チェックイン	ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
10:40	11:25	【ワークショップ①】 海外研修の振り返り (個人としての学びや視点の変化)	ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
11:25	11:30	休憩	
11:30	12:35	【ワークショップ②】 海外研修の経験を踏まえて、これからのアクションを 考える	ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
12:35	13:15	昼食	
13:15	14:10	地球ひろば見学	
14:10	15:20	【昨年度の参加者のお話】 新井 誠司氏 (和洋九段女子中学校高等学校 高等学校教頭)	ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
15:20	15:30	休憩	
15:30	17:55	【報告会準備】 振り返りダイアログを踏まえて、発表準備	ファシリテーション: GiFT 木村 大輔
17:55	18:00	【閉会】主催挨拶	JICA広報部長 竹田 幸子



海外研修の振り返り(校長グループ)



海外研修の振り返り(教頭グループ)



海外研修の振り返り(教育委員会グループ)



過年度参加者のお話



報告会の流れについての話し合い



集合写真

(4) 報告会 2024年1月24日(水) 17:00-18:30 (オンライン)

どうする!?これからの教育～カンボジアと日本のつながりから学ぶ～

開始	終了	プログラム	担当等
17:00	17:10	【開会】 主催挨拶 研修概要説明&ゲスト紹介	司会: GiFT 忍 頼子 JICA地球ひろば推進課 課長 畔上 智洋 加藤 真佐美
17:10	18:20	【報告発表】 ◆海外研修の様子紹介動画 ◆訪問先での気づきと学び+疑問 ・学校 ・教員養成大学、イオンモール ・ハート・オブ・ゴールド、サッカーアカデミー、 水道局 ・疑問 ◆質疑応答 ◆どうする?これからの教育 ・今、国際理解教育・開発教育が必要な理由 ・管理職としての役割 ・管理職としてできること、その実践例とこれから ・指導主事としてできること ◆質疑応答	進行: 川本 重樹 発表者: 藤田 万愉子 徳永 佳代 告野 さつき 神田 昌彦 発表者: 三宅 育代 藤田 有記 田崎 潤 多田 幸城
18:20	18:25	【講評】 文部科学省総合教育政策局国際教育課 課長補佐 岡嶋 美和氏	
18:25	18:30	【閉会】 主催挨拶	JICA地球ひろば推進課 課長 畔上 智洋

オンライン報告会

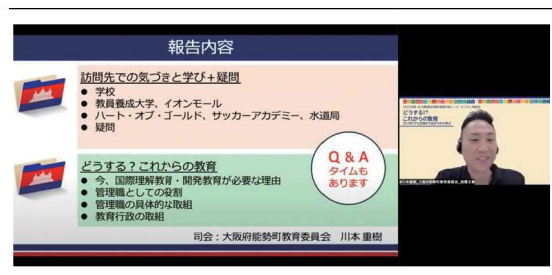
2023年度 JICA教師海外研修
(教育行政コース)

どうする!? これからの教育

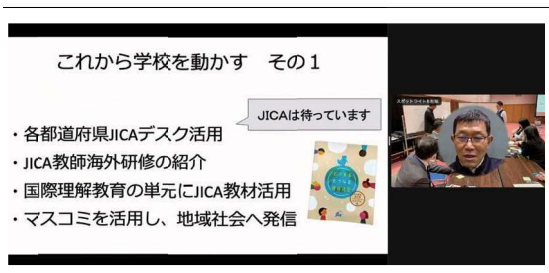
～カンボジアと日本のつながりから学ぶ～

- 開会のあいさつ
- 研修概要
- 報告発表
- ご講評 文部科学省総合教育政策局国際教育課
課長補佐 岡嶋美和さま
- 閉会のあいさつ

2023年度JICA教師海外研修(教育行政コース)



発表の流れ 進行: 川本 重樹

訪問先での気づきと学び
発表者: 藤田 万倫子訪問先での気づきと学び
発表者: 徳永 佳代訪問先での気づきと学び
発表者: 告野 さつき訪問先での気づきと学び+疑問
発表者: 神田 昌彦どうする? これからの教育
発表者: 三宅 育代どうする? これからの教育
発表者: 藤田 有記どうする? これからの教育
発表者: 田崎 潤どうする? これからの教育
発表者: 多田 幸城



海外研修視察レポート

訪問先：JICAカンボジア事務所

日時：2023年12月25日（月） 10:00-12:00

JICA事業概要説明

柳川伸二次長より、カンボジアにおけるJICA事業の概要を丁寧にレクチャーをしていただいた。国家開発戦略として従来の四辺形戦略を五辺形戦略に改めたこと、特にデジタル化社会の構築が大きな課題であることが分かった。

また、JICAの基礎教育協力の成果として教員養成大学建設や教材開発、初中等カリキュラム開発、教員研修の4つの柱があるとの説明があった。課題としては、指導教官の指導力の更なる向上やカリキュラムを継続的に改善する仕組みの構築、教材開発できる人材の育成、教育研究の質の一層の向上が挙げられている。国づくりにおける人材育成の重要性と、JICAの戦略的かつ多角的な支援及び多様な協働の尊さを再認識することができた。

（記録担当：神田昌彦）



カンボジアにおけるJICAの取り組みについての質疑応答

JICAカンボジア事務所にて
柳川次長によるレクチャー



JICAカンボジア事務所スタッフとの
集合写真

訪問先：ノロドム小学校

日時：2023年12月25日（月） 13:30-14:30 概要説明 14:45-16:30 小学校訪問

JICA民間連携事業 アプリ教材「Think!Think!」の活用による初等教育のSTEM学力向上に関わる普及・実証・ビジネス化事業

まず、JICAカンボジア事務所にて、本事業の受託団体であるワンダーファイ社の社員の方からアプリ教材「Think!Think!」についてと事業概要の説明があり、「自分たちのアプリの価値を広めたい、分かってもらいたい」という熱い情熱が感じられた。このアプリでの学習を通して、生徒は楽しみながら、遊びながら学ぶことができる（play based learning）とのこと。また、なかなか主体的な学びを実現できていないカンボジアの現状の教育システムの中で、「覚えさせる」教育から「考えさせる」教育への転換ができること、問題解決のプロセスを通して思考力育成ができることが大きな価値であるように思えた。そして、このアプリでの学習成果（IQアップ）やモチベーションの向上も中室牧子氏（慶應義塾大学教授）の調査によっても裏付けられているようであった。

その後「Think!Think!」を活用しているノロドム小学校へ移動し、授業を参観した。子どもたちはみんな真剣に、また目をキラキラさせながら、意欲的にアプリでの学習に取り組んでいた。一斉授業とは全く異なり、それぞれが個別に学んでいた。どの生徒も素直に楽しそうに学んでいた様子が印象的だった。教師はできない生徒をサポートしたり、よくできた生徒を手を叩いて褒めていた。

次に、「Think!Think!」のアプリを使っていないクラスも訪問したが、実際どのような授業が行われているかまでは見ることはできなかった。しかしどのクラスでも生徒はしっかりノートを取りながら学んでいた。そのような姿の生徒たちはとてもかわいらしかった。

続いて、校長室で校長先生からの説明を聞き、質疑応答の時間が持たれた。

（質問と回答のポイント）

1. 生徒の座っている時の姿勢がいい→あらゆる場面で指導している
2. 義務教育の科目は？→四つ。国語、数学、科学、社会
3. 英語教育の位置付け→コミュニケーションツール、必要なもの、特別な教科
4. いじめや不登校はあるのか？→あるかもしれないけど、もしあったら家族本人に契約書を書いてもらってやめてもらう。それでもやめなければ逮捕もしくは転校してもらう。
5. 先生向けの研修システムは？→教育省が用意した研修プログラムがある
6. 校長になるには試験があるのか？→つながりからの推薦
7. 生徒がはまっているものは？→分からない
8. 学校行事はどのように決める？→政府が決めてくれるが来年はどうなるか分からない
9. アプリを使っている生徒と使っていない生徒の勉強へのモチベーションの違いは？→ない

（記録担当：告野さつき、藤田万愉子）



ノロドム小学校校長からの説明を受ける研修参加者



ノロドム小学校にて真剣な眼差しで授業を受ける生徒たち



授業参観をしながら質問をする研修参加者



デジタルラーニングセンターでThink!Think!アプリを使って学習する生徒たち

訪問先：教員養成大学 (PTEC)

日時：2023年12月26日(火) 10:00-13:00

【JICA技術協力事業】教員養成大学設立のための基盤構築プロジェクト

予定より早い到着となったが、早速ダーク・チア副学長にご対応いただいた。また、3名の3年生が教員養成大学の概要を、事前にかなり準備してくれたであろう、パワーポイントを使用して説明してくれた。

カンボジアの学生たちは想像していたより小柄で、大学生というより高校生のような印象に少し驚きを感じた。教育政策アドバイザーの松田徳子氏によれば、カンボジアの若者は概して体格が小さいとのこと。学生の多くが地方から、慣れない大都市プノンペンに来て、苦勞しながらも懸命に学んでいる様子であった。地方の学校ではパソコンの環境もなく、研究自体も初めてのことで、首都と地方の学力格差についても感じていると話していたが、奨学金を受けながら学ぶ学生も少なくないようである。

日本と異なり、大学入学の段階で赴任する地域がある程度決まっている、すなわち教員になることが決まっているようで、彼らの教員になりたいという志は高いものがある。皆一様に、この国の次世代の人材育成に貢献したいために教員を目指したと言っていた。しかし、現場での実習では、十分に読み書きができない子ども、学習する家庭環境にない子どもの姿に悩む姿も垣間見られた。男子は15歳から仕事に就くことが可能であり、女子は学問より早く結婚してほしいと考える保護者が多く、ゆえに中退も多いとのことであった。カンボジアの学生たちは夢を抱いて教員を目指すも、厳しすぎる現実に直面しているということが理解できた。

図書館も見学したが、松田氏によれば内戦の影響でクメール語の文献が少ないがために、蔵書の数も限られているようで、空の棚が目立っていた。そのような中でこの大学の1、2期生の書いた研究論文は本当に貴重だと感じた。

挨拶の機会がありそこでも述べたが、教員は大変ではあるが、本来夢のある仕事でもある。彼らが様々な事情により教員になることを諦めないようにと願いたい。JICAの教員養成大学への援助について、実際に訪問して理解が深まった。今回一番視察したかった場所であった。

(記録担当：徳永佳代)



教員養成大学の学生によるプレゼンテーション



カンボジアの伝統的なスカーフ(クロマー)を受け取る参加者

訪問先：スパイリエン中高等学校

日時：2023年12月26日（火） 16:00-17:00

【JICA海外協力隊活動視察】増澤尚亮氏（サッカー）

スパイリエン中高等学校に隣接する天然芝グラウンドにて、U15とU18の2つのカテゴリのトレーニングを視察した。また、カンボジアサッカー連盟スパイリエン州青年スポーツ局初等教員課への派遣という形で活動している、協力隊員の増澤尚亮氏から活動についての概要説明があった。協力隊の任期終了が2024年3月に迫っているが、チームにどんな変化が見られたかをデータで示してくれた。出席率の向上に伴いチーム力も向上したことが一目瞭然であり、数字の力は人を納得させる。次に、子どもたちへのインタビューをした。U18に所属する選手は出席率が低下したときに仲間へ練習参加を呼びかけたとのこと。増澤氏がその彼に期待していることが伝わってきた。U18の選手は小柄だが練習を休まず、サッカーに対して真摯に向き合っていることが分かった。しかし、逆にいうとサッカー以外に楽しいことがないのはどうなのか？という疑問も湧いてきた。

（記録担当：田崎潤、神田昌彦）



JICA海外協力隊の
増澤尚亮氏からの活動の説明



メモを取りながら説明を聞く参加者

訪問先: スバイリエン中高等学校

日時: 2023年12月27日(火) 8:00-11:00

【JICA海外協力隊活動視察】高木大作氏(体育)

①校長のお話

- 生徒数 3109人
- スタッフ 170人(うち、女性69人)
- 70クラス(高:37、中:33)
- 日本の技能的な支援、物理的な支援に関して感謝の言葉を述べられた。

②研修参加者自己紹介

③教員向け発表

- 最新の日本の教育事情等(子ども主体の学びへ)
- 日本の学校の様子(体験学習、イベントなどの取り組み)
- 地域との連携(地域と連携した町の広報動画制作)
- サイエスマジック(子ども自身に考えさせるため、「不思議だな?」を見せる)

④生徒向け発表

- 大阪府および神戸市内の高等学校の生活の様子をまとめた動画を紹介
- 生徒からの質問(勉強の仕方、休憩時間、学校で行うスポーツ、生徒用ロッカー、昼食、部活動、試験回数や内容、補習、長期休暇、テストの回数、高校三年時の最終試験の有無、制服など)

⑤高木氏のお話

- 指導要領、指導者が整ったのは最近である。ただ体育の教員が体系的な指導を受けてきていないことが課題
- 道具の支援はありがたい。しかし、道具が無くて工夫して生徒に楽しませながら指導することが大切なので、道具支援に頼りすぎるのは良くないとも感じている。
- 開発教育を広めていく工夫として、教材を創り出して興味を持って触れてもらうことや、仲間を増やすことが大事と考えている。

スバイリエン中高等学校はソフト面、ハード面ともに良い環境とはいいがたい。そのなかで子どもたちは生き生きと生活している姿が見られた。日本の子どもは溢れるほどの道具で、恵まれた施設で、手厚い指導を受けているが、その表情は? 学びに向かう姿勢は? と考えさせられる視察であった。

(記録担当: 川本重樹、藤田有記)



スパイリエン中高等学校の教員・生徒との集合写真



参加者に日本の学校などについて質問をする
スパイリエン中高等学校の生徒



JICA海外協力隊の高木大作氏からのお話



参加者による発表の様子

訪問先: スパイリエンヌワット小学校

日時: 2023年12月27日(火) 13:30-15:00

【JICA海外協力隊活動視察】目黒友佳子氏(小学校教育)

福島県出身の目黒友佳氏より、協力隊としての活動紹介と授業参観があった。着いてすぐ、休憩中の子どもたちがたくさん近くに寄ってきてくれた。どの子の顔も屈託のない笑顔でかわいい。遠くにいる子どもたちも目が合うと手を振ってくる。子どもたちは、純粋さがあり、人と関わりたいという気持ちが感じられた。

目黒氏は2019年に協力隊としてボリビアに派遣されていたが、コロナ禍に帰国。2023年にカンボジアのスパイリエン州小学校教員養成学校に派遣された。訪問時は学生が卒業した後の時期であり、新入生が2月に入学してくるまで学生はいないとのことであった。そのため、目黒氏は2月まで小学校で体育と英語を教えており、2年生40人の初めての授業を参観させてもらった。

- 児童は、お昼の11:00から14:00は自宅に帰る。
- カンボジアの先生方は、昼休みや放課後を使って、塾を経営することが多い。
- 学校の一室を借りたり、自宅を開放したりして、副業している。
- 40分授業
- 書く、読むが大切。
- 同じ学年を担当することが多い。

① 授業参観

いつもは体育の授業は午前であるが、特別に午後に設定していただいた。12月から新学期で、日本と同じように体力テストをする時期で、訪問した際は体力テストに必要な体重と身長を測っていた。担任の先生と目黒氏が補助する中、2年生の子どもたちは静かに座って自分の番が来るのを待つことができていた。中にはお菓子を食べている子がいたが、別に気にならない文化のようだ。目黒氏は、終始笑顔で子どもたちと触れ合うのが楽しそうだった。休み時間にはたくさんの児童に囲まれて人気の様子で、カンボジアの先生として充実した日々を送っておられた。

② 教員養成学校サイタ校長先生のお話

- 附属小学校 1年～6年 13クラス
- カンボジアでは児童が午前と午後に入れ替えて登校するが、この小学校の児童は11:00から14:00のお昼の休み時間に帰宅し、また登校して学習する。
- 体育の授業では、腕や足の単純な動きの体操や運動を繰り返すだけの内容となっている。ハート・オブ・ゴールドの支援を受けて、2月から新しい指導法を導入する。

③ アヌワット小学校セイシーユ校長先生のお話

- 職員18名、13クラス、児童数577名(女子304名、男子273名)
- 職員室はなし。休み時間に校長室を使う人もいる。
- 1クラス40～57名
- 勤務時間 7:00-11:00 14:00-17:00

その後、他のクラスも参観させていただいた。児童は一生懸命丁寧な字で板書を写し、意欲的に学習していた。PCやタブレットは使っておらず、数年前の日本のようだった。子どもたちは素直に先生の指示に従い、楽しそうに学習していた。校長先生の話から、主体的な学習をしたいという願いはカンボジアも日本と同じであると感じた。

(記録担当: 藤田有記、三宅育代)



生徒の身長測定をするJICA海外協力隊の目黒友佳子氏



体育の指導内容のイメージを日本の教員に聞く
カンボジアの教員



真剣に授業を受ける
スパイリエンヌワット小学校の生徒



スパイリエンヌワット小学校の生徒とともに

訪問先：ハート・オブ・ゴールド活動現場（会場：オリンピックスタジアム）

日時：2023年12月28日（水） 8:00-11:00

【JICA草の根技術協力事業視察】**小学校から高等学校まで一貫した高い質で学ぶ「Physical Education for All」プロジェクト**

「Physical Education for All」プロジェクトでは、小学校、中学校、高校と段階的に体育普及のための学習指導要領や指導書を学年別に作成されており、3つの州でモデル校を指定し、体育普及のためのワークショップやモニタリングを行っているほか、コンテンツの開発や本邦研修などを実施している。

訪問当日はワークショップ（日本でいう文科省が行う指導主事研修）が行われており、前半の講義と後半の実技練習を見学することができた。また、そのワークショップの参加者2名（各州の教育省の方）との質疑応答が行われた。

それぞれの州の指導する立場の数十人がオリンピックスタジアムの狭いスペースで和やかに、カンボジアの教育省の方から陸上競技の指導を受けていた。バトンバスの練習では、日本の体育指導という点で見ていると気になるところがいくつもあった。ハート・オブ・ゴールドのスタッフの森洋貴氏は10種競技が専門だが、特に何も言わずに見守っている。日本の専門家が質の高いスポーツ指導をカンボジアの教員に向けて直接実施すれば、もっと早く上達するだろう。指導書もわざわざ実技をしたことがないカンボジアの人にイラストを書いてもらっているが、日本の子ども向けの実技の教科書の方が質も高い。翻訳した方がいいのではと感じたので、気になって森氏に聞いてみると、少し思っていたものと違う内容が返ってきた。それは、あくまでもカンボジアの教育省の方がカンボジアの体育を普及させることが目的であり、ハート・オブ・ゴールドはあくまでもサポートする側。今のカンボジアでできる指導を尊重することがサステイナブルな教育につながるということだった。

日本（自分自身も）の教育に置き換えてみると、子どもたちに失敗させず質の高いことをさせるために、何から何までやってしまっていないか。高い質というのは、あくまでも大人から見えたゴールであって、目の前の子どもたちに求めるものではないのではないか。ハート・オブ・ゴールドの活動は、日本や自身のことを振り返る機会となった。

（記録担当：告野さつき）



ハート・オブ・ゴールド森洋貴氏による
Physical Education for Allについての説明



ワークショップ参加者へのインタビュー
(質疑応答)



バトンバスの練習をするワークショップ参加者



テープを巻いて作った球で砲丸投げの練習するワークショップ参加者

訪問先: Social Compass活動現場(会場:イオンモール3)

日時: 2023年12月28日(水) 14:00-16:00

SDGs×アート・デザインで世界を変える!

Social Compassの中村英誉氏は、美術大学で映像化アートを学んでおり、学生時代に猿岩石の影響を受けてバックパッカーとしてカンボジアを訪れ、この国の良さを感じた。その後、イギリスのアニメーション会社へ就職したが、3年後に日本のベンチャー会社に再就職し、テレワークでも仕事ができるということでカンボジアに移住したという経歴を持っている。中村氏は「デザインで世界を変える」という熱い情熱を持っておられた。

ジェシー・アン氏は、日本語教室で日本語を学び、通訳として中村氏に出会った時にアートの才能を見出されて、現在はアーティストとして活動をしている。イオンモールの壁画やカンボジアのキャラクター「インディ、ワッティー」などを手掛けている。「人との出会いの中でインスピレーションを受けて成長している、出会いにとっても感謝している」という言葉が印象的であった。

二人とも穏やかな雰囲気の中に熱い思いを秘めており、アートを教育、経済、環境、医療、児童支援等様々な分野のことに結び付け、カンボジアの発展のために尽力しておられた。「どうせするなら最先端のものを学び、ともに作り出す」という信念を持ち、デジタルアートやVRギャラリーなど新しいことに挑戦しておられた。常に課題意識を持ち、ゴールを見据えて工夫しチャレンジしていく姿に心を打たれた。

二人の話聞く中で「人とのつながり」を、自分の成長や社会貢献に活かしていくことが大切だと感じた。人と出会うチャンスはたくさんあるが、活かすというのは難しい。自分も、このカンボジアでの研修という貴重な機会をいただき、多くの出会いがあった。自分のできることを考え、この出会いを先生方や子どもたちの教育に活かしていきたいと強く感じている。

(記録担当: 三宅育代)



Social Compass中村英誉氏より説明を受ける参加者

子どもたちの絵を使ったミューラルアート(壁画)の前
にて中村氏とジェシー氏とともに

訪問先：JICAカンボジア事務所およびプンブレック浄水場

日時：2023年12月29日（金） 8:00-9:30 概要説明 10:00-11:00 プンブレック浄水場

【JICA水道事業の協力（プノンペンの奇跡）】

2001-2003プンブレック浄水場拡張計画（無償資金協力）

まず、JICAカンボジア事務所にて、カンボジアにおける水道事業の概要説明があった。1990年代、内戦後は水道管の不法接続や盗水、不衛生な品質であったが、わずか15年で高品質の水を提供できるようになった。これは「プノンペンの奇跡」と呼ばれている。プノンペン市水道公社のエク・ソンチャン氏が強力なリーダーシップを発揮した。2003年にWHO飲料水質ガイドラインを満たし、飲める水の認定を受けた。この年の無収水率は17.1%（漏水や盗水が主たる原因）となり、先進国のそれを下回る率であった。現在は、全国に高品質の水を供給できるように事業を進めている。地方においては民営水道も多く、規制監督や水道関連法の整備等の支援を展開している。これらの協力により、この20年（2000年以降）で水道が使える人口が5倍に拡大した。

また、料金徴収率は1999年に98.9%となり、徴収方法はメーターを設置し料金徴収員が測定するという日本と同様のシステムを採用している。カンボジアの水道の成功は、エク・ソンチャン氏の水道公社、カンボジア政府、カンボジアを支援するドナー（日本・フランス・世界銀行・アジア開発銀行）といったあらゆるレベルの人々の協力によって成し遂げられたものである。

次に、プンブレック浄水場の施設を見学した。日本の企業がインフラ整備に協力している。一方で、北九州市も人材を派遣している。教育の視点からすると、地方自治体と地元企業が国際貢献をすれば、そこに国際理解教育の種を見つけることもできるのではないだろうか。

（記録担当：多田幸城）

プンブレック浄水場見学



水質について説明を受ける参加者

訪問先：JICAカンボジア事務所

日時：2023年12月29日（金） 12:00-14:00

海外研修の振り返り

海外研修の締めくくりとして、この6日間を通しての学びについて振り返りを行うとともに、本研修での経験をどのように還元していくのかを考える時間をとった。導入として、自分は何を学びたくてカンボジアに来たのか、国際理解教育/開発教育の意義（何を思っていたか）、自分が教員になろうとした時の意識、今の自分の教育に対する思いなどを問い直し、その上で国際理解教育/開発教育の推進を軸に、ビジョンややりたいことを考えて共有した。さらに、それらの実現に向けて、課題、今ある資源、機会（opportunity）、選択肢（option）についてグループで意見交換を行った。

その中で、長野県の選抜高校生20名に海外に出ることの大切さを伝える、夏のJICA教師海外研修を選択研修に入れる、国際理解の人材育成（企画し実行できる人を育成）、研究指定校に国際理解教育を入れる、年次に応じてオンラインでつなぐ（子どもの異文化交流のきっかけ）、などのアイデアが共有された。





参加者レポート

氏名	所属	職名	担当業務
神田 昌彦	弘前市立南中学校	校長	学校運営全般

1. 本研修を通して、「今、この時代に、学校教育において国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

今、世界を見渡してみるとロシアによるウクライナ侵攻やイスラエルとパレスチナの問題をはじめ、国家間の争いが頻発している。加えて、人類の活動に起因する環境劣化や気候変動の進行が深刻な様相を呈している。まさに、国際的な難題が山積している状況ではないだろうか。したがって、私たち人間の社会が今後も継続的な繁栄を維持するためには、自国の利益を追求するばかりでは立ち行かないのは明らかである。

また、国家間の垣根が低くなり社会のグローバル化が急速に進展している今日、学校教育においては広い視野をもって異文化を理解し、異なる習慣や文化を持った人々と共に生きていくための資質や能力を育むことが重要になる。

次代を担う子どもたちの健全な育成に資するため、上述のような世界の動きを敏感に捉えさせ理解を深めさせるとともに、児童生徒一人一人へ今後の国際社会でどのように生きていけば良いのかを考えさせる取り組みが必要である。さらには、一歩進んで国際社会にどのように貢献できるのかについて意識させ、将来に向けて明るい見通しを持たせる指導が求められていると思う。

本研修で訪問させていただいた小学校や中学校、教員養成大学での体験は、我が国の教育環境がいかに恵まれているかに気付く発端を与えてくれた。加えて、カンボジアの子どもたちや先生方の礼儀正しさや目の輝きから学ばせていただいたことがたくさんあり、日本が見失いかけている学ぶことの喜びや楽しさを再確認する場にもなった。

カンボジアでの貴重な5日間は、国際理解教育や開発教育を推進することの大切さについて認識を新たにする契機であったことはもちろんのこと、参加者の皆さんと相互に意見交換する中で自らに課せられた使命を自覚し決意を確かめ合う機会にもなった。

2. 本研修を踏まえて、これからの学校経営方針やビジョン（教育目標、目指す学校像、児童・生徒・教員像等）に国際理解教育や開発教育をどのように統合できそうか、お書きください。教育行政の場合は、各自治体が設定している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるかという視点で書いてください。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育／開発教育をどのように位置づけるか。

- 本校が掲げている教育目標「自立 自愛 友愛」の「友愛」の具体的な視点として国際理解の観点について加筆する。
- 本校が校是として示している「南中魂の追求」において、私たちの生活が国際社会との相互依存の関係に支えられていることを踏まえ、多様な人々と協働しながら種々の困難を克服し持続可能な社会の創り手となるべく、国際理解教育や開発教育の重要性とそのための取り組みについて明確に示す。
- SDGsと環境教育の推進を学校経営計画へはつきりと端的に位置づける。

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育／開発教育の取り組み(行事、授業、課外活動など)

- 開発教育講演会を本校創立40周年記念事業として実施する。講師はルワンダの教育を考える会理事長 マリールイズ氏を予定している。
- 国際理解の視点を活かした道徳授業を全学年で展開する。
- 総合的な学習の時間を活用して国際理解教育を計画的に実施する。
- 本校では白神山地が世界自然遺産に登録されてから30年目を迎えた今年度から「マタギの知恵から学ぶSDGs」の学習を開始した。この取り組みを次年度以降も継続することで、国際協調の視点を活かした環境教育やSDGs学習を計画的、組織的に展開する。
- 学校を挙げて「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」への応募に取り組み、本校の生徒一人一人にかけがえのない地球に生きる私たちに課せられた課題と未来への希望について考えさせたいと思う。

成田さん(弘南中) 特別賞/JICAエッセイコン



JICAのエッセイコンテストで審査員特別賞に輝いた成田さん

弘前南中学校3年の成田芽生さん(15)が、国際協力機構(JICA)主催の「国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2023 中学生の部」で審査員特別賞に輝いた。中学生では県内唯一の受賞。成田さんは「(受賞に)本当にびっくりした。家族も喜んでくれて、とてもうれしい」と満面の笑みを見せた。

コンテストは「海外移住懸賞作文」として1962年に始まった。今年度のテーマは「地球に生きる私たち～未来へつなげるために～」で、全国から中学生1万7439点、高校生2万153点、計3万7592点の応募があった。

成田さんは「和装のスズメ」と題し、日本を含む先進国が輸出した古着の最終集積地のアフリカが抱えている問題に焦点を当て、日本の伝統衣装である着物や浴衣といった和服の重要性、将来の夢をまとめた。

作品は、成田さんがテレビのニュースでアフリカの国々が抱える着古問題を知ったことから始まる。役に立っていると思っていた古着のリサイクルが輸出先の環境を破壊し、その国の繊維産業を脅かしているとし、「衣類の大量生産、大量消費で生じる廃棄物をSDGs(持続可能な開発目標)にかこつけて押し付けているのだとしたら、何ともやるせない」と強調。

その上で、日本の着物や浴衣が自然環境に優しい天然由来の素材で作られ、年齢や時代を問わずに着ることができるとし、「ファストファッションからの脱却」「伝統的な民族衣装への回帰がSDGs推進の切り札になる」と訴えた。

最後に服飾デザインを学ぶ高校への進学に憧れ、「和服の持長を最大限に生かした新たなファッションの開拓にまい進する」と目標を掲げた。

成田さんは神田昌彦校長の勧めでコンテストに応募した。エッセイコンテストへの挑戦は初めてとし、「作文は得意ではなかったけど、(テーマを見て)書いてみようと思った」と語った。母親の影響で小さい頃からファッションに興味があり、テレビのニュースで取り上げられていた古着問題に衝撃を受けた。着物の歴史文化などをまとめた本を読んでいたことも重なり、1週間ほどで応募作品を書き上げたという。

コンテストを通じて「視野を広げることができた」とし、「着物のアレンジなど長く楽しめるファッションを生み出すデザイナーになって、世界で活躍したい」と力強く語った。

JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト受賞記事(陸奥新報社提供)
<https://mutsushimpo.com/news/8fkw3ci8/>

③国際理解教育／開発教育を継続的に推進するための学校運営、教職員育成・研修等(次の世代にどのようにバトンをつなぐか?)という視点も含めて書いてください)

- 若手職員の教師海外研修はもとより、海外協力隊及び日本人学校への参加を積極的に後押ししたいと思う。
- JICAデスクの皆さんを招聘した校内研修会を企画している。
- 総合的な学習の時間の年間計画に国際理解教育及び開発教育を位置づける。そして、計画的かつ継続的に国際理解教育を推進する。

3. 年度内および次年度の業務において、国際理解教育/開発教育推進のために自分が取り組みたいことを3つ挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定、ほかの教職員への研修参加の後押しなど)

- 開発教育講演会を本校創立40周年記念事業として実施する。ルワンダの教育を考える会理事長であるマリールイズ氏を招聘し、「大切なもの『命・平和・教育』～わたしたちにできる国際協力と国際貢献～」のテーマで講話を賜り、本校の子どもたちはもちろんのこと保護者の皆さんや地域の方々、歴代の教職員の皆さま方を対象に、国際理解、開発教育の意義や必要性を広く啓蒙したいと計画している。
- 若手教員の国際理解教育への理解を深め意欲を醸成するために、自分の経験を自らの職場内で共有するとともに、国際理解教育に関する研修会を実施する。
- 地区中学校教育研究会や県研究会、さらには自分が所属している全国組織(全日本教職員連盟、全日本中学校特別活動研究会)をも通じて広く周知し、国際理解教育の必要性を訴えたいと企図している。

4. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか？主な3つを挙げてください。

- 校内研修会へ国際協力推進員の皆さまを招聘して国際理解研修会を実施したい。
- 総合的な学習の時間に国際協力推進員の皆さまを招き、子どもたちの視野を大いに広げさせたいと計画している。
- JICA国内拠点や各県のJICAデスクの皆さんとの交流会を行いたいと思う。
- 今回のカンボジアでの研修で出会った皆さんと機会あるごとに交流会を実施したい。

5. 本研修を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。

私の職場では、定例の職員会議を延長する形式で本研修についての報告会(1時間程度)を実施した。研修中に自分で撮った写真や皆さまからいただいた写真を投影しながら、カンボジアの国情や人々の生活の様子、JICAの活動状況、教育事情等を説明した。

参加者は、本校の職員24名である。主な感想としては、「カンボジアの学校の様子を知り、日本の子どもたちがいかに恵まれているのが分かった」、「自分は過去に備品の不備について不満を漏らしたことがあったが、カンボジアでは物が無くても工夫して授業しているので素晴らしいと感じた」、「水や電化率等の課題がよく分かった」、「発展途上国の実情に驚いた」、「JICAが行っている支援の重要性が分かった」、等があった。

6. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

全地球規模での自然環境劣化が進展している。マイクロプラスチックの問題をはじめ、海洋汚染、生物多様性の喪失など枚挙のいとまがないほどである。それらの中でもとりわけ深刻なのは、森林減少とCO₂の増加だと思う。人口の爆発的増加、森林破壊、化石燃料の大量消費等により、地球全体で1日あたり種子島の面積に相当する森が失われていることを知っているだろうか。併せて、人類の活動によって大気中のCO₂濃度が激増している現実を直視しなければならない。

欧州のコペルニクス気候変動サービスによると、2023年の世界平均気温が過去10万年で最も高かったことが明らかになり、国連のグテーレス事務総長は「地球沸騰の時代」と表現した。さらに、英国南極研究所からは「気候変動が既に転換点を越えた可能性がある」と発表されている。すなわち、今すぐCO₂の排出を全世界で0にしても、地球温暖化の流れは止められないのではないか、と言うわけだ。

訪問中、カンボジアでは電化率がほぼ100%だと伺った。しかしながら、農村部においては洗濯機や冷蔵庫などの電化製品の普及率が30%ほどにとどまっているとのことであった。彼らが、先進国並みの電力を消費することで、どのような事態を招くのかは容易に想像できる。地球温暖化ガスが排出される加速度が日ごとに増加する事実から逃れられないわけである。とはいえ、発展途上国の電化率向上は喫緊の課題であるし、先進国は今さら電化生活の便利さを手放せないであろう。

このような状況下で、CO₂の排出を抑えながらいかにして電源を確保すべきなのだろうか。昨今は太陽光や風力発電が脚光を浴びているものの、天候で上下する発電量を安定化させるためにバックアップ電源(火力発電)の併用が不可欠であることを見落としている。したがって、現実的には、当面の間、原子力発電に頼らざるを得ないことが明白である。東日本大震災以降、原子力利用に対する風当たりが非常に厳しい状況になっているが、もっと冷静な議論が必要である。そして、地球全体のために日本が果たすべき役割を見据えなければならないと思う。

本研修への参加を通して、発展途上国の電力事情についての現実を知り、CO₂排出量増加の問題や環境問題について改めて考えることができた。我が国は、今こそ、世界のエネルギー問題にきちんと向き合い、先進国の役割をしっかりと果たさなければならないのではないかと強く感じた。

氏名	所属	職名	担当業務
三宅 育代	美浜町立美浜東小学校	教頭	

1. 本研修を通して、「今、この時代に、学校教育において国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

今、この時にも世界の至るところで国際紛争や内戦、飢餓や環境破壊など、たくさん問題が起きている。情報化・国際化が進み世界の出来事がリアルタイムで分かるこの時代、平和な世界を築いていくためには国家間の理解や協力が必要であることをカンボジアでの研修において再確認した。

ポルポト政権時代に知識層の虐殺や都市破壊で壊滅的な打撃を受けたカンボジアだが、実際にカンボジアを訪れて近代化が進んでいることに驚いた。若い世代が多く、人々のパワーに圧倒された。また、都市部では廃墟と近代的なビルが共存し、至る所で新たな建築が進んでおり、急速な進歩の真只中にいることを体感した。国に勢いがあり、この先も発展を遂げるであろうことが予想できる。この背景には日本をはじめとする各国の支援がある。今回の研修で日本の支援がカンボジアの教育にも大きな影響をもたらしていることもよく分かった。

世界の歴史や現状を考えると、世界中の人々が共に幸せな社会を築き上げることはとても難しい。しかし「世界中の人々の幸せの実現」のために私たちは行動を起こしていかなければならない。そのきっかけとして、学校教育において国際理解教育が重要である。人が幸せな人生を望む思いは国が違っても同じであると思う。しかし、住んでいる所の気候や環境等から生じる、培ってきた生活様式や文化、宗教などのほんの少しの違いを理解し合えないと争いを招いてしまう。また、そこに仲間意識が極端に芽生え自己の豊かさだけを追求していくと、他者を排除したり、攻撃したりすることにもなりかねない。国際理解教育において、まずは世界の現状を知ること、そして互いを理解し合い寛容な精神をもつことが大切である。そして自分ができることを考え、行動することで世界の平和につなげていきたい。学校教育の中で世界のことを「知る」「理解する」「考え、行動する」ような国際理解教育を積極的に進めていくことが重要だと感じた。

2. 本研修を踏まえて、これからの学校経営方針やビジョン（教育目標、目指す学校像、児童・生徒・教員像等）に国際理解教育や開発教育をどのように統合できそうか、お書きください。教育行政の場合は、各自治体が設定している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるかという視点で書いてください。

① 学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育／開発教育をどのように位置づけるか。

- 学校経営方針「互いを認め合う集団作り」の中で国際理解教育を位置づける。
- 「助け合い・認め合い・励まし合う集団作り」のビジョンの中に国際理解教育を位置づける。
- 人権教育の中に国際理解教育を位置づける。

② 学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育／開発教育の取り組み（行事、授業、課外活動など）

- 海外の方との交流
- 各教科や総合的な学習等においてSDGsの内容の確実な取り組みと国際理解教育の推進
- 国際理解をテーマにした講演会の実施

③ 国際理解教育／開発教育を継続的に推進するための学校運営、教職員育成・研修等（次の世代にどのようにバトンをつなぐか?という視点も含めて書いてください）

- 国際理解教育についての校内での継続的な教職員研修
- 教員との協働による国際理解教育に関する授業作り
- JICAや海外にいる方など国際理解教育に関わっている方の人材バンク作り

3. 年度内および次年度の業務において、国際理解教育/開発教育推進のために自分が取り組みたいことを3つ挙げてください。（所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定、ほかの教職員への研修参加の後押しなど）

- 教職員等へ報告会と研修（勤務校職員・町の小学校教育研究会の教員・教頭会・教育委員会など）
- 児童に向けて国際理解教育の授業
- ほかの教職員への研修参加の後押し

4. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク（国際協力推進員）や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか？主な3つを挙げてください。

- JICAの国際協力出前講座
- 国際理解教育の指導案作成
- 海外の教育事情調査

5. 本研修を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。

- ①所属校での教職員への報告
- ②町の人権教育研究会中学年部会での報告
- ③教頭会での報告
- ④所属する教育サークルでのサークル員への報告
- ⑤所属校3年生への授業
- ⑥所属校4年生への授業
- ⑦所属校5年生への授業

〈所属校における授業〉

【ねらい】

- カンボジアについて話を聞き、日本と同じことや違うことがあることを知る。
- 国家間で助け合って発展していくことの大切さに気付く。
- 「違いを理解する、違いを認め合う、助け合う」ことで世界中の人々が仲良く幸せに暮らしていくことの重要性を理解する。

【内容】

- カンボジアのお札から日本との関係を予想する。
 - カンボジアの地理や歴史を知る。
 - カンボジアの学校や児童生徒の様子を知る。
 - 日本がカンボジアを支援してきた事業を知る。
 - カンボジアの自然や食生活、文化を知る。
 - 宗教・文化。生活様式の違う世界中の人々が仲良く幸せに暮らすにはどうしたら良いか考える。
- ★報告を聞いて終わるのではなく、世界のことに興味を持ち、主体的に他の国のことを調べてみる、国家間の関係を調べてみるなど、次のステップにつながることを意識した。



カンボジアについての授業の様子



地図帳を広げカンボジアの紙幣を見つめる生徒

6. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

国際理解教育/開発教育の究極の目指すところは人類の幸せ、世界平和であると感じている。それには、争いのない持続可能な社会の創り手を育てていくことが重要である。そのために、私は3点のことを重視していきたいと考えている。

1点目は、「子どもたちが様々な国のことを様々な角度から「知る」「理解する」「考え、行動する」ことができる教育をすること」である。カンボジアの方から、日本の教育についてたくさんの質問を受けた。こちらが、カンボジアのことを知りたいと思っていた以上に、カンボジアの方も日本に興味があり、日本のことを知りたいとおられた。質問を受けて、国際交流というのは、自国のことも、相手の国のことも、知ることから始まるのだと改めて感じた。ただ知るのではなく相手のことを、まずは共感的に理解する。課題を感じれば課題解決のために、考えて行動する。このような姿勢を持つことが、大切ではないか。国際化、情報化が日々進歩し、地球規模で課題が山積している現在、宇宙船地球号のつもりで人類が手を取り合っていかなければならない。「当たり前」「普通」という言葉をよく聞くが、「当たり前」「普通」は国によって、人によっても違う。相手のこと、世界のことを「知ろう」という気持ちから始まるのだと思う。この研修を通して、世界平和と幸せのために「知る」「理解する」「考え、行動する」という教育が必要であり、このような教育の場を作っていきたいと思っている。

2点目は「身近なところから他者理解教育をすること」である。私は小学校で勤務しているが、小学校では子どもたちは、クラスの子を知る、理解する、お互いが居心地よく生活できるように考え、行動する、ということ学ぶ。「家族、クラスの友達や先生と良好な関係を築く」、「ごみを分別して捨てる」、「食べ物を残さない」、「物を大切に使う」など「ここで、みんなが居心地よく過ごせるためのルール」を共通理解し、他者のことを考えて行動できる子どもを育てる教育の場作りを確実にしていきたい。このような身近なことが国際理解教育につながっていくのだと考えている。

3点目は「考えを共有し学び合う教育の場をつくること」である。今回の研修では、ことあるごとに考えの共有や協働的な作業を行ってきた。これは、これからの教育の場で大切なことだと感じた。振り返りの時間に「自分は何が印象に残っているか。そのように感じる理由はどこからくるのか。」また、「自分はどう思うか。」「それはなぜか。」「今後どんなことが、できそうか。」「なぜそう思えるのか。」などの視点で考えを共有した。この「自分の考えを伝える。」「考えに至った理由を考え伝える。」ということは自分の考えを整理するうえでも非常に大切である。子どもにもそのような思考の経験をさせることが、国際理解教育でも大切だと感じた。また事前研修から海外研修まではカンボジアで何をどう発表するかを、事後研修からは報告会で何をどのようにどうやって発表するかを、参加者の方とオンラインで何度も話し合った。チームとして共にアイデアを出し合い、話し合い、協働的に何かを作り上げていく作業はとても楽しく、また自分の考えの幅が広がった。子どもたちにも教職員にも、このような学びの場を積極的に作っていきたいと思う。このような学びがお互いの考えを理解し合い、高め合い、アイデアを出し合って持続可能なより良い生活を実現し、幸せな社会を築くことにつながるのではないかと思う。

この研修では、多くのことを学ばせていただきました。一緒に参加した方々、JICA関係者の方々、GiFTの方々ははじめ、日本やカンボジアでお世話になった方々に、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

氏名	所属	職名	担当業務
田崎 潤	群馬県立前橋西高等学校	教頭	

1. 本研修を通して、「今、この時代に、学校教育において国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

本題に入る前に、戦後日本が奇跡的に短期間で復興を果たすことができた要因を2つの面から考えたい。1つ目はアメリカ合衆国をはじめとする西側諸国による多額の援助だ。特に、1964年の東京オリンピック成功のために整備された東海道新幹線や東名高速道路は、アメリカ合衆国からの援助が大きい。冷戦による西側諸国の思惑もあったが、日本は援助を受ける側となって復興を果たすことができたのだ。2つ目は「教育」の力である。日本国憲法において世界平和を追求することを約束した「平和主義」、民主的な社会形成に大きな役割を果たした「基本的人権の尊重」は、勤勉で和を尊ぶ日本人の心に短期間で浸透した。過去の日本の教育者たちが学ぶことの意義を全国に広げてくれていたお陰だろう。

この2つの面から考察すると「今、この時代に学校教育において国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」が見えてくる。昨今の世界情勢による物価の高騰や不安定な為替相場は、国土が狭く、天然資源が少ない日本にとって、非常にダメージが大きい。今の日本の社会生活を保つためには、争いのない平和な世界が必要なのだ。そのために日本は、国際理解教育を積極的に推進して、世界平和をリードできる人材育成することが求められる。

その方法として、国際理解を観点とした学校行事を実施するのも1つの方法だが、教科指導の中でもできることがある。今回の研修で「アート×平和」というテーマで活動をしているSocial Compassの中村英誉氏とジェシー・アン氏に出会うことができた。その理念や具体的な活動は納得することばかりで、行事や探究学習に頼ろうとしていた私に新たな気付きを与えてくれた。

また、何よりもこの研修で出会った様々な立場の方々が、日本を代表して活動されていることに感謝したい。研修最終日、トゥール・スレン虐殺博物館の場所を、街の人に尋ねる機会があった。いずれの人も嫌がることなく応対してくれた。そのうちある方が私の着ていた「JICA」マーク入りポロシャツを指さし、何かを言っていた。何を言っていたのかはよく分からなかったが、親切に身を乗り出して方向を示してくれた。言葉は通じなかったが、私たちが日本人であることを理解していたのだろう。カンボジアでのJICAやNGO等の地道な支援活動への理解が、隅々まで浸透していることを感じた瞬間であった。様々な立場で日本と世界をつなぐ仕事をしている方々が、その国にある社会課題解決のために懸命に尽力していることに敬意を示したい。一人一人のできることは小さな一歩だが、たくさんの一歩が世界を動かす力になるのだ。

私はこの研修を通して得た様々な知見と人脈を生かして、国際理解教育や新しい学びの構築を進めたい。その中でも、コロナ禍以降内向き志向が増している高校生たちへ、社会課題解決に果敢にチャレンジすること、一歩前に踏み出すことの意義を伝えたい。そのためには、「知識・技能」に頼りすぎていたこれまでの日本の教育から、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性」を加えた学力観に移行している今の教育改革の流れを押し進めたい。特に、「学びに向かう力・人間性」を伸ばすのは、多様な価値観を持つ人たちとの触れ合いだと私は考える。学校が門戸を開いて子どもたちを社会に放ち、リアルな学校外での体験と対話の機会を積極的に設定したり、世界で活躍している熱い大人たちを招いたり（オンラインでも）することが、子どもたちにマインドチェンジのスイッチを入れるのだ。私は、その機会を作るコーディネーターとしての役割が管理職にあるのではないかと、この研修で確信できた。

2. 本研修を踏まえて、これからの学校経営方針やビジョン(教育目標、目指す学校像、児童・生徒・教員像等)に国際理解教育や開発教育をどのように統合できそうか、お書きください。教育行政の場合は、各自治体が設定している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるかという視点で書いてください。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育／開発教育をどのように位置づけるか。

- 本校は普通科と国際科が設置されており、国際理解教育推進に理解がある高校である。
- 来年度制定のスクール・ポリシーの軸となるグラデュエーション・ポリシーに「多文化共生・共創社会」実現のための「つながる力」を身に付けることができる学校と明示した。
- カリキュラム・ポリシーでは、グローバル教育の充実と地域や社会とのつながりを大切にした多様な他者との学習を展開することを明示した。
- アドミッションポリシーには、世界中の人たちとつながることにチャレンジしたい生徒であることを求めた。

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育／開発教育の取り組み(行事、授業、課外活動など)

●「総合的な探究の時間」

これまで本校では学年進行で実施していたこの時間の計画を、3年間を見通した構成に練り上げる。ポイントは、様々なフィールドで活躍する方々との出会いと対話を軸とした学びである。生徒たちはこの経験を通して、自分がどのような存在でありたいかを考え、キャリア形成の土台を創造する機会としたい。

●「インターナショナルデー」

年1回、国際科中心に県内のALT10名を本校に招く学校行事である。各国のお国柄の紹介や様々なアクティビティを通し、多文化共生・共創社会について学んでいる。この行事を更に充実させ、青年海外協力隊経験者や地域の外国人労働者等を招いて、国際理解を深めることと身近な国際化の進展について認識させたい。

●「異文化理解」

国際科の教育課程に位置づけられている科目。他国の生徒とオンラインで交流したり、日本と他国の文化の違いについて、仲間と協働的に学んだりと非常に有効な国際理解教育を実践している。この授業に東京フィールドワークを組み込み、JICA地球ひろばへの訪問を実現させたい。

③国際理解教育／開発教育を継続的に推進するための学校運営、教職員育成・研修等(次の世代にどのようにバトンをつなぐか?という視点も含めて書いてください)

●スクール・ポリシー制定によるビジョン共有

主事・主任の先生方と5回にわたる委員会を実施し、本校の地域における在り方や生徒にどんな力を身に付けさせたいかを共有することができた。また、その具体的な制定に当たっては生徒・保護者にもどのような力を身に付けたいかを広く意見を集め、国際的な視野に立ったポリシーをつくることができた。

●総合的な探究の時間の3年間計画の構築

学年進行による細切れの計画ではなく、学校としてスクール・ポリシーを達成させるために3年間を見通した計画を構築する。特に、国際理解分野での問いを抱える生徒については積極的に関わり、ファシリテートしたい。

●国際科における2年間の指導計画

前年踏襲にとらわれず、国際理解教育/開発教育を展開させる。身近な外国人との交流、県内・東京フィールドワークなど、オンラインでの海外との交流だけでなくリアルでの交流も進めたい。

3. 年度内および次年度の業務において、国際理解教育/開発教育推進のために自分が取り組みたいことを3つ挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定、ほかの教職員への研修参加の後押しなど)

- 勤務校にて「校外研修発表会」を実施し、生徒の発表とともに今回の研修について報告したい。
- 群馬県全日制教頭・副校長会の研修会にて、カンボジアでの研修の報告を実施する。
- 群馬県高等学校教育研究会「地理部会」にて、今回のカンボジアでの研修の報告を踏まえた国際理解教育についての講演会を実施する。
- 来年度のJICA教師海外研修(一般コース)への参加を促す。

4. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか?主な3つを挙げてください。

- 勤務校における「国際科」の年間授業計画構築にあたり、JICA群馬デスクに講師派遣や講演会のコーディネート等の協力をお願いする。
- 生徒の国際理解教育フィールドワークを、JICA地球ひろば等の東京における国際理解教育拠点に受入依頼をする。
- 今回のカンボジアでの研修や以前のスリランカでの研修での経験を生かし、講師として様々な場での講演会をJICA群馬デスクと企画・運営をする。

5. 本研修を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。

- 群馬県教育委員会(2024年2月5日)
- ぐんまグローバルセミナー2024 教師海外研修報告会(2024年2月17日)



6. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

まずは、この教師海外研修(教育行政コース)に関わったすべての方々に感謝したい。JICAやGiFTの方々、私たちが国際理解教育の担い手として活躍できる人物だと信じ、参加者選考から準備、訪問、報告会まできめ細かく私たちを導いてくれた。私たちは今、スタートラインに立ったばかりだ。期待に応えられるよう、互いに切磋琢磨したい。

この研修以前から、私は高校における「総合的な探究の時間」を、インプットした知識技能をアウトプットする場として重要視していた。各教科の授業においても、教員からの一方的な一斉講義から双方向的対話型の授業への転換が叫ばれている。その手法として、アクティブラーニングが様々な高校で展開されているが、最も子どもたちの心に刻み込まれるのは本物との出会いだと考えている。教室を飛び出し、様々な場で活躍する熱い大人の生き方を知り、どんな社会課題があるのかを学ぶことは、子どもたちが自分の生き方、在り方を考える一助となる。

高度経済成長期以降、日本では地方から都市に人が流れ、核家族化が進み、地域での教育力が低下したと言われる。近所にいた口うるさい頑固おやじや井戸端会議で盛り上がるおばちゃんがちまたから消え、子どもたちが大人と言葉を交わす機会が減った。私たち教員は教育者である立場の前に、一人の人間として子どもたちに生き方、在り方を語り、寄り添いながら導いていく伴走者の役割がある。その中で私は開かれた学校の中心となり、子どもたちと様々な自治体や企業、地域等をつなぐコーディネーターとしての資質を高め、今後も精力的に活動したいと考えている。

氏名	所属	職名	担当業務
多田 幸城	千葉市教育委員会 学校教育部教育指導課	指導主事	道徳教育・人権教育

1. 本研修を通して、「今、この時代に、学校教育において国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

宗教対立が多くの命を危険にさらす紛争へと移行する現在、違いを受け入れる相互理解と寛容が求められる時代となってきた。国際理解教育や開発教育は、まさに多様性を認め、相互に人格と個性を尊重しあう教育である。本市においても、国際理解教育は単に理解するだけでなく、自らが国際社会の一員として主体的に行動し、発信できる児童生徒の育成を目指している。

本研修では、現地に赴き様々な支援の現場を視察したが、私自身これまでは自国の価値観が正しいと疑わず、一方的な視点でそれらを解釈していたのではないかとことに気付かされた。相手国の文化や習慣を尊重し、多様性を受け入れ、その上で支援や協力を行うことの重要性を確認できた。

つまり、先進国の価値観で発展途上国を理解し、経済や教育を先進国のそれに近づけることが支援の形ではなく、そこに生活する人々が何を求め、より良い生活（人生）を送るためには、何ができるのかを考え行動に移すことが国際協力であると感じた。国際理解教育や開発教育は、そのような視点を持ち、行動できる地球市民を育てる重要な教育であると再認識することができた。

2. 本研修を踏まえて、これからの学校経営方針やビジョン（教育目標、目指す学校像、児童・生徒・教員像等）に国際理解教育や開発教育をどのように統合できそうか、お書きください。教育行政の場合は、各自治体が設定している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるかという視点で書いてください。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育／開発教育をどのように位置づけるか。

教育行政においては、「こども家庭庁」の設置と「こども基本法」の成立にともない、「子どもの権利」が一つのキーワードとなっている。国際理解教育や開発教育は、その根底で「子どもの権利条約」や「こども基本法」、「千葉市こども基本条例（仮称）」と関連していると捉えることができる。

「子どもの権利条約【差別の禁止（差別のないこと）】」には、「すべての子どもは、子ども自身や親の人種や国籍、性、意見、障がい、経済状況などどんな理由でも差別されず、条約の定めるすべての権利が保障されます」と記されている（下線筆者）。一方、国際理解教育では、「広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第1次答申）』」とあり、これらの親和性を感じることができる。

つまり、国際理解教育や開発教育を推進し、その資質や能力を身に付けていく過程で、子どもの権利条約を並列的に提示することで、この二つのねらいが根底で重なっていると考えられるのではないかと考えることができるのではないかと。日本で学ぶ子どもたちが、同年代の発展途上国の子どもと交流する機会があったとしたら、自分との共通点を見つけるとともに、大きな違いに気付くことだろう。そこに、「子どもの権利」という視点があれば、さらに深い学びにつながるのではないだろうか。一見別々のものに見えるが、これらの統合は可能であり効果的であると感じている。

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育／開発教育の取り組み(行事、授業、課外活動など)

前述した、「子どもの権利条約【差別の禁止(差別のないこと)】」を達成するための、国際理解教育や開発教育の取り組みとしては、多様性を認めることをねらいとした授業等が考えられる。一例としては、JICA地球ひろばホームページ(<https://www.jica.go.jp/Resource/hiroba/teacher/case/>)に掲載されている、道徳科「笑顔をふやそう!ー違いを認めてー」の指導案が参考になる。これまでの授業のねらいはそのままに、国際理解教育や開発教育の教材を使用することで、それらを統合した授業が実施できる。大切なことは、新しく何かを始めるのではなく、今あるものと統合すること。組み合わせでより良いものを作り出すことである。

一般的に「〇〇教育」(キャリア教育や防災教育。国際理解教育と開発教育もそのひとつ)は、単独の教科ではないため授業時間が確保されていない。したがって、これらを推進しようとする場合、必ず授業時間の壁にぶつかる。だからこそ、既存の授業との融合が重要となってくる。教育委員会としては、人権教育研修と国際理解教育研修の双方でこれらをアナウンスすることで周知を図りたい。

③国際理解教育／開発教育を継続的に推進するための学校運営、教職員育成・研修等(次の世代にどのようにバトンをつなぐか?という視点も含めて書いてください)

残念ながら、国際理解教育や開発教育を意欲的に推進している教師は多くない。また、熱心な教師がいる場合も、その思いを校内に広げることは困難を要する。その要因は様々だが、そのひとつとして国際理解教育や開発教育の必要性を理解してもらえないことが挙げられる。ならば、教育委員会が国際理解教育の研究指定校を設定するという方法も考えられる(千葉市は現在、国際理解教育の研究指定は行っていない)。強制的にという表現は良くないが、良くも悪くもきっかけが必要である。教育委員会だからできるというメリットを生かし、国際理解教育に長けた人材活用と人材育成の両面を達成できるのではないだろうか。

これまでも、青年海外協力隊の出前講座を活用した授業実践は多くみられたが、「特別な人」の経験談というフィルターがあったことは否めない。国際理解教育や開発教育に熱い思いを持った海外経験者が授業する場合も、「特別な人」と映ってしまいがちである。ややもすると、レクチャー式の授業を展開している光景も目にする。すると、子どもたちは、自分とは少し遠い存在に感じてしまうのではないだろうか。自分と重ね合わせることが困難になってしまうと、深い理解は難しい。

つまり、これからは「特別でない人」が推進する国際理解教育が求められている。必ずしも海外経験ありきではなく、子どもと同じ目線で共に学んでいく教師が推進者となるべきである。何も海外に目を向けることだけが国際理解教育や開発教育ではなく、身近な対象(外国籍児童生徒・在日外国人)を活用した展開の可能性も考えられる。したがって、誰もが国際理解教育や開発教育の推進者となりえるのである。

3. 年度内および次年度の業務において、国際理解教育/開発教育推進のために自分が取り組みたいことを3つ挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定、ほかの教職員への研修参加の後押しなど)

- 国際理解教育研修のブラッシュアップ(悉皆研修との融合)
- JICA千葉デスクや国際交流課、地域の国際交流団体との連携による、国際理解教育の推進
- 学校訪問時の自己紹介にて、海外に出る魅力について語る。「渡航のすゝめ」

4. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか?主な3つを挙げてください。

- ネットワークの構築(気軽に意見交換や相談ができる関係性)。教育委員会は、学校とこれらをつなぐコーディネーターとしての役割を担う。
- 国際理解教育を広くとらえ、多様性を認めることをねらいとした道徳教育や人権教育の研修の共同開催(JICAより講師派遣、運営は教育委員会)。
- 教員のキャリア形成における、海外経験(ボランティア・就労)の効果の検証。

5. 本研修を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。

右下のような写真などを利用して、フォトランゲージを実施した。多くの参加者が抱いているカンボジアのイメージと現状が異なっており、この10年での発展のスピードに参加者一同驚いていた。先入観やイメージは、なかなかアップデートできないことに気付かされた。

参加者からの気付きの共有の後、カンボジアでの研修内容を報告した。教育分野を中心に質疑がなされたが、日本の教育は現在の方向性であるのか、これが話題の中心となった。特に、教育内容に関して、日本は学校教育で扱う内容が多すぎないか。もっとシンプルにして、今必要な資質能力を身に付けることに特化したほうが、子どもたちの笑顔につながるのではないかという意見が出された。カンボジアの子どもの笑顔は、日本の子どもたちのそれとは違う印象を誰もがもっていたことに危機感のようなものを感じた。

また、教育環境は十分とは言えないが、成長著しいカンボジアの状況を考慮すると、羨ましいとの声も上がった。それは、将来は(極端に表現すると、明日は)今日よりも良くなっているという思いを誰もが抱いている強さは、学力の国際比較では測れないだろう。OECDのPISA調査の順位に一喜一憂しているだけでは、これからの時代は生き抜けないという意見に達した。



6. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

一人の力でできることは限られているが、教師であれば多くの子どもに国際理解教育や開発教育を通して、異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力を育成することが可能である。教育行政に身を置いているのであれば、多くの教職員に国際理解教育や開発教育の重要性を伝え、推進してもらうべきを持っている。

つまり、多くの人とこの思いを共有することが大切であり、それには多くの努力は必要ない。無理せず続けることが近道であったりもする。熱い思いは冷めやすいが、温かな思いは持続するのではないだろうか。

氏名	所属	職名	担当業務
徳永 佳代	長野県松本県ヶ丘高等学校	校長	

1. 本研修を通して、「今、この時代に、学校教育において国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

コロナ禍が明け、国境を越えた人の移動が再び始まっている。町を歩く外国人も増えた。観光客だけではなく、地元の松本市は、24年1月に外国人居住者が過去最高となった。これからますますボーダレスな社会となっていく中、身近な社会でも多文化共生が推進されている。国際理解教育は遠い世界の話ではない。広い視野を持ち、異文化を理解するには、まずシンプルに、日本の外の世界を知る、ということだ。他を知り、理解するところから国際理解教育は始まる。

災害の際に、在住外国人が情報を得ることが難しかったという事例も聞く。日本のルールに戸惑う人も多かっただろう。これからを生きる子どもたちには、異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力を身に付けることが必須である。国際理解教育は自分の身の回りにあるという感覚、「自分事」であることが大事で、教科を問わず必要な教育であると考えている。

そんな時代にあって、校長等管理職がこの研修に参加することに以前よりも大きな意義を感じる。「隠れたカリキュラム」という言葉が示すように、管理職の存在や姿勢は、教員や生徒に言葉にせずとも影響を与えている。校長自身が国際理解/開発教育について関心を寄せている、という有り様は、生徒や職員に良い影響を与え、直接授業を担当する教員が研修することとは別の教育的効果があると考えている。

2. 本研修を踏まえて、これからの学校経営方針やビジョン（教育目標、目指す学校像、児童・生徒・教員像等）に国際理解教育や開発教育をどのように統合できそうか、お書きください。教育行政の場合は、各自治体が設定している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるかという視点で書いてください。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育／開発教育をどのように位置づけるか。

本校のスクールポリシー（3つの方針）に関連して位置づける。もともと本校では「他者との関わりから学ぼうとする生徒」を生徒募集方針に掲げており、教育課程編成・実施方針に「交流・連携・対話的な活動」を通して、「関わる力」をつけることを目指している。主体的な学習や探究活動において、国際理解教育や開発教育は重要なテーマになりうる。

生徒育成方針では「自分の道を知り、歩んでいくために他者と関わる力」を3年間で生徒に付けさせ、卒業させることを目指している。それはすなわち世界に生きるための学力と幅広い教養、グローバルな視野を持ち、社会に貢献できる力を付けることを意味する。国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる力を育成するという観点から、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ることも求められる。新たに何かをする、というより、もともとある本校の3つの方針を具体化するための一つのテーマとして、国際理解教育/開発教育を位置付けることが可能である。

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育／開発教育の取り組み（行事、授業、課外活動など）

本校では探究を軸に教育活動を行っているが、国際理解教育・開発教育はここに具体的に落とし込んでいくことができる。現在、地元のNPO法人「中信多文化共生ネットワーク（CTN）」と連携協定を結び、松本市内に住む外国由来の住民への理解促進と共生に本校生徒が積極的に関わるように推進しているところであるが、引き続きこれを

進めていく。例えば在住外国人が理解しやすい「やさしい日本語」についての探究を行っている生徒もあり、国際理解教育の視点が欠かせないテーマを選択する生徒は今後も増えていくと思われる。

また令和5年度は、ドイツ、カンボジア、キルギスなど、留学生や海外研修のネットワークにより、学校に居ながら様々な国の関係者が来校して講演したり、オンラインでつないだりすることができた。引き続き海外への窓は大きく開けておきたい。

本校では、コロナ禍明けから「大勢を引率する海外研修」から「個人で企画する海外留学・海外研修」へとシフトした。行き先として欧米のほかにカンボジア、フィリピン等途上国でのボランティアを選択する生徒も多い。1週間以上の海外研修は、事前事後の学習も含めて探究の増加単位扱いとしている。また国や県の留学支援は積極的に応募させているが、生徒が海外で研修することや、そのための事前学習などオンラインを活用しながら積極的に進めていきたい。特にJICA駒ヶ根にご協力いただいての開発教育は今後も実施していく。留学生についても引き続き積極的に受け入れていき、生徒の多様性を確保する。

③国際理解教育／開発教育を継続的に推進するための学校運営、教職員育成・研修等（次の世代にどのようにバトンをつなぐか?という視点も含めて書いてください）

時間はかかるが学校全体の空気を醸成するには、絶えず教員へも働きかけることが重要である。JICAの教員研修や、他の企画プログラムへの参加を積極的に教員へ勧めていきたい。本校では、国際交流担当の係があるが、職員が積極的に動いてくれていることもあり、学校全体として国際理解教育／開発教育は必要不可欠という空気は醸成されてきていると感じている。そして一つ一つの取り組みの積み重ねにより「異質なもののへの寛容」が養われてきているのではないかと感じている。

3. 年度内および次年度の業務において、国際理解教育／開発教育推進のために自分が取り組みたいことを3つ挙げてください。（所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定、ほかの教職員への研修参加の後押しなど）

- ①県教委が主催する高校生の海外留学支援事業「信州つばさプロジェクト」事前学習会における講話の実施。
- ②校長会での取り組み発表において、学力向上策のひとつとして、国際理解教育の推進について触れる。
- ③校長講話の機会に全校生徒へ伝えていくとともに、他の教員へ本研修参加を勧める。

4. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク（国際協力推進員）や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか？主な3つを挙げてください。

- ①これまでも駒ヶ根訓練所のご協力で生徒の研修を行ってきたが、これを定期的なプログラムとなることが理想である。かつて県教委主催事業で、訓練所に一泊して訓練生と生活を共にしたり、語学研修の実際を体験したりするプログラムを実施しているが、良いプログラムであったので、本校生徒対象に実施したい。
- ②海外協力隊訓練生による出前講座の活用
- ③本校1年生の東京での研修先について、地球ひろば等を検討する（令和5年度は国連大学）。

5. 本研修を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。

- ・長野県教育委員会主催「信州つばさプロジェクト」カンボジア派遣チームの事前学習会にて、現地の写真等を使った30分ほどの授業を行った。あくまで導入で、気になったことは自分で調べられるような内容とした。
- ・県内の希望する高校生を対象に、JICA海外協力隊としてカンボジアに派遣されている高木大作氏とオンラインでつなぎ、その仕事内容や活動の様子などについてお話いただいた。



「信州つばさプロジェクト」事前学習会における講話

6. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

カンボジアには5年ほど前に訪れたことがある。しかし今回の訪問で、発展のスピードが想像以上であることに驚いた。特にスマートフォンの普及である。家電話からガラケー、そしてスマホ、と時間をかけて発展してきた日本からすれば、二段飛び・三段飛びに進化している。私たちの常識でこの国の発展を考えるべきではないのではないかと感じた。

一例を挙げると、教員養成大学へ行き、「図書館に本がない(内戦の影響でそもそもこの国の出版文化が貧弱)」と聞き、単純に気の毒な気がした。が、別の視察場所にて、この国の人は本をあまり読まないが、YouTubeやFacebookをととてもよく利用すると聞いた。確かに、小学校の校長先生も「視察したことをどんどんSNSにアップしてほしい」と言っていたし、我々の水道公社への訪問の様子も数時間後にはFacebookに上がっていた。ソーシャルメディアが日本以上に身近に存在している。もしかすると、紙媒体を通り越して一気にデジタルへ進んでいくのではないかと。「図書館が必要」と考えるのは私たちの常識での考えであって、この国には当てはまらないのかもしれない。出版文化がないことが良いか悪いかは別として、日本の常識で考えていては、これからの不確実な世界においては解決しないこともたくさんあるのではないかと感じた。

日本政府の支援に加えて、様々な民間アクターが活躍しているのが、カンボジアという国の興味深い点であった。アートで社会貢献をする、というクリエイター集団のことも今回初めて知った。途上国支援というと、つい私たちはお金での支援を思い浮かべてしまうが、彼らの活動から、社会貢献の形は様々だということに気付かされた。そしてカンボジアというのは一つのケースであって、国際協力というのは「誰かのために何かをしたい」というシンプルなアクションでできるのではないかと感じた。これは生徒たちに伝えていきたいテーマでもある。

最新の海外事情を視察する、特に今回のように教育の現場を中心に視察できたというのは、自身の視野の拡大につながり有意義であった。学校経営を任される立場として、これからの学校の在り方を考える上でも有効だと感じた。既成概念を取り払い、自由な発想でこれからの教育に取り組んでいきたい。目の前の生徒たちの教育について、改めて考える機会をいただき、関係各位に改めて感謝申し上げます。

氏名	所属	職名	担当業務
川本 重樹	能勢町教育委員会 学校教育総務課	指導主事	小学校教育・中学校教育担当

1. 本研修を通して、「今、この時代に、学校教育において国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

私は、6年間の教育委員会での勤務を通じて日本の教育に課題を感じるとともに、窮屈さを感じていた。そこで、思い切って違う世界を覗いてみたいという思いと、背中を押していただける方との出会いがあり、この研修に参加した。

◆社会をより良くしようと努力されている方々との出会い

カンボジア王国において、経済格差や教育を取り巻く課題は大きい。JICA海外協力隊やハート・オブ・ゴールドのカンボジアにおいてより良い教育を提供しようと努力されている姿、教員養成大学(PTEC)の学生さんの教育の発展に寄与しようとする姿、またその方々の「自らの知識を高め、教えるため」「尊敬し合いたい」「仕事で成功したい」「みんなが良い生活をするため」などの思い、決して恵まれた環境とは言えない状況の中で、社会をより良くするために他人に対して何かしてあげようとしている熱い思いに出会うことができた。

また、カンボジア王国で感じた周りの人に対して寛容である態度(交通ルール、挨拶習慣など)や他人を敬う態度からも、あたりまえのことを大切にしながら、お互いに気持ちよく過ごそうとしている空気を感じた。

◆「行かな分からん」

私は志望動機に「SDGs、持続可能な社会の実現と見聞きはするものの、聞いたことや文献で読むことだけの知識である。この機会を通じて、日本では経験することのできない学びを体験し、自分の可能性を広げ、今後の教育活動に活かしたい」と書いた。今回の研修を通じて、本当に貴重な体験をさせていただいたと感謝している。「経験し、肌で感じる」がいかに大切なことであると再認識した。

以上の2点より、現時点では国際理解教育や開発教育を推進する意味は、「一步踏み出して、外の世界に触れ、様々なことを感じ、行動する」人を増やすことであると考えます。様々な文化に触れる経験をすることで、自らの強み、弱みを知ることができる。私自身この研修を通じて、日本の教育の良い点についても再認識をすることができた。また今まで能勢町で大切にしてきた人権教育に通じる部分が非常に大きいとも感じた。

2. 本研修を踏まえて、これからの学校経営方針やビジョン(教育目標、目指す学校像、児童・生徒・教員像等)に国際理解教育や開発教育をどのように統合できそうか、お書きください。教育行政の場合は、各自治体が設定している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるかという視点で書いてください。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育／開発教育をどのように位置づけるか。

- 能勢町教育基本方針に「国際理解教育」の内容を設定
- 能勢町人権教育研究協議会の「多文化共生部会」の取組みにおいて国際理解教育を推進
- 能勢地域学校連携・一貫教育(旧小中高一貫教育)の取組みにおいて国際理解教育を推進

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育／開発教育の取り組み(行事、授業、課外活動など)

- 能勢地域学校連携・一貫教育「SDGsフェスタ」において国際理解教育の取り組みを発信
- 能勢町教育委員会主催研修において国際理解教育研修を実施することで、教員による授業実践を推進

③国際理解教育／開発教育を継続的に推進するための学校運営、教職員育成・研修等(次の世代にどのようにバトンをつなぐか?という視点も含めて書いてください)

- 能勢町教育委員会主催研修において国際理解教育研修を実施
- 能勢町役場内での研修内容の報告(総務課・福祉課等)

3. 年度内および次年度の業務において、国際理解教育/開発教育推進のために自分が取り組みたいことを3つ挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定、ほかの教職員への研修参加の後押しなど)

- 能勢町教育基本方針に「国際理解教育」の内容を設定・推進
- 能勢町教育委員会教職員対象研修の企画・実施
- 能勢地域学校連携・一貫教育(旧小中高一貫教育)における国際理解教育の取り組みを推進
- 能勢町教育委員会定例会での研修報告
- 校長・副校長会での研修報告

4. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか?主な3つを挙げてください。

- 伝達研修への参画
- 本町の取り組みの情報共有(豊能地区相互交流研修等)
- 能勢地域学校連携・一貫教育の国際理解教育の実践を公開

5. 本研修を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容（報告会など）。

- 能勢町教育委員会事務局（学校教育総務課）内での研修報告
- 能勢町教育委員会定例会での研修報告
- 校長・副校長会での研修報告
- 能勢町役場内での研修報告（総務課・福祉課）

6. その他所感（研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか？どのような教育の場を作っていきたいか？など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。）

この研修に参加させていただき、あたりまえのことであるが、「思い切って挑戦してみることで、新しい学びが生まれる。」ことを再認識した。今まで、国際理解教育に対して積極的に取り組んできたわけでない私がこの研修に参加させていただき、大きな刺激を受けた。また、この研修に関連して、東京での事前研修・事後研修、オンラインでのミーティングや発表、SNSを活用して情報共有や振り返りなど、日常とは違う仕事を経験させていだいた。

今回の研修参加者は全国から集まった9名であった。その方々との交流もたいへん大きな財産となった。特に帰国してからの皆さんの素早い動き（発信）には驚いたとともに、自分も実践を推進しようという意欲につながっている。

日々の忙しさの中で、「挑戦する」ことで、自分自身が「わくわく」する研修に出会うことができた。今回の経験を、「国際理解教育の推進」という形で生かしていきたい。

氏名	所属	職名	担当業務
告野 さつき	神戸市教育委員会 総合教育センター	指導主事	中堅教員研修・校内研修

1. 本研修を通して、「今、この時代に、学校教育において国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

今、学校現場のように閉鎖的な空間にいと目の前に起こっている物事や状況だけで教育をしてしまう。様々な教育ワードをただゴールとして捉えがちだが、そもそもなぜ国で言われている教育が求められているかと立ち返った時に、国際的な視野を持つことこそが原点に変える機会になる。

また、昨今の世界情勢で平和であることこそが最重要課題となっている。今の日本で当たり前だとされている価値観が世界中での当たり前ではないということを知り、理解し共存していく考えを持つためにも必要である。また、今の高齢化社会の日本にとって今までのような社会の仕組みでは成り立たないということを考えるためにも重要である。

2. 本研修を踏まえて、これからの学校経営方針やビジョン（教育目標、目指す学校像、児童・生徒・教員像等）に国際理解教育や開発教育をどのように統合できそうか、お書きください。教育行政の場合は、各自治体が設定している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるかという視点で書いてください。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育／開発教育をどのように位置づけるか。

（第3期神戸市教育基本計画より）

- 基本政策2 豊かな心の育成—③子どもたちの心を育む人権教育の推進
- 基本政策4 一人一人に応じたきめ細やかな教育・支援の充実—⑦帰国外国人児童生徒の支援の充実
- 基本政策7 神戸の国際教育・防災教育のさらなる推進—②国際理解・国際交流事業の推進

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育／開発教育の取り組み（行事、授業、課外活動など）

- 中堅教員研修の人権教育というに多文化共生という視点から研修を実施する。
- JICA関西での研修を中堅教員研修の選択研修に位置付ける。

③国際理解教育／開発教育を継続的に推進するための学校運営、教職員育成・研修等（次の世代にどのようにバトンをつなぐか？という視点も含めて書いてください）

- JICAなどが実施している研修への参加を促す（今後、研修を各都道府県等で増やしていくというのは現実的ではない）。
- 教員免許を取得できる大学との連携を図る。
- 国際理解教育＝英語教育というところからの脱却。そのためにも自身の保健体育、または総合的な学習の時間での取り組みを推進し、公開していく。

3. 年度内および次年度の業務において、国際理解教育/開発教育推進のために自分が取り組みたいことを3つ挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定、ほかの教職員への研修参加の後押しなど)

- 2の②と同じ
- 知り合いの教職員への研修参加への後押し
- センター内での研修を実施

4. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか?主な3つを挙げてください。

- 国際理解教育の教材作り(保健体育の授業・総合的な学習の時間)
- 全国の海外研修参加者や元JICA海外協力隊員(教員)とプラットフォーム等で意見交流・研修企画等
- オンラインで海外と学校現場がつながりやすい環境作り

5. 本研修を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。

現在勤務している総合教育センター内で研修を実施。主にオンライン報告会のカンボジアでの学び、気付きの資料を活用。それに加え今後、神戸市でどのように国際理解教育を展開したいかを話した。JICAとの連携の仕方や、地球ひろばで紹介していただいた資料や教材の紹介。また、今後、教育総合センターの図書コーナーで国際理解教育コーナーを特設することになった。

6. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

- 子ども、大人と分けて考えるのではなく、様々な年代が共に考える場を作る。共創する社会を目指すためにも、自分自身がコーディネートできる力を付ける。
- 子どもに社会に出る機会を設ける。中学校は、自身のキャリアを考えるスタート地点だが、受験のための学習になっている。この教室に長い時間いる教育スタイルから脱却するためにも、まずは学校外の取り組みを増やし、そのような実践をする仲間を増やす。国際理解だけではなく、様々な視点で学べるような取り組みを考えていきたい。
- 多文化共生という視点で、日本語指導のできる教師を目指す。そのためにも資格をとり、学校の中心となって教育を推進していきたい。

氏名	所属	職名	担当業務
藤田 万愉子	田辺市立上芳養中学校	教頭	

1. 本研修を通して、「今、この時代に、学校教育において国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

予測困難な時代、受け身や指示待ちではなく、自分で考えて、判断し、行動する力や、自分で課題を見つけ、解決するために何ができるか考え、行動する力が日本の子ども達には必要だと思う。そのために、我々教員は、「人生をどう生きるか？」を自分事として考えさせ、より良く生きるのに必要な資質能力や豊かな人間性を育む必要がある。そのための一つのリアルな教材として、国際理解教育や開発教育を推進したい。世界や世界の課題について知ること、自分にできることを考え、行動できるようになる。それこそが、「どう生きるか？」を考えることにつながると思う。

2. 本研修を踏まえて、これからの学校経営方針やビジョン（教育目標、目指す学校像、児童・生徒・教員像等）に国際理解教育や開発教育をどのように統合できそうか、お書きください。教育行政の場合は、各自治体が設定している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるかという視点で書いてください。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育／開発教育をどのように位置づけるか。

- 育てたい生徒像について、ESDの基本的な考え方の視点を入れながら、全教員で考え、共通理解する。
- 全教員で立てた学校経営方針を達成するために、具体的な個人の研究テーマを立て、そのテーマの研究に励む。
- 学年末に、その個人研究テーマの実践報告会をして、お互いの学びにする。

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育／開発教育の取り組み（行事、授業、課外活動など）

- SDGsやESD教育を総合の時間に取り入れる。（カリキュラムの見直し）
- 各教科で国際理解教育や開発教育について学ぶ単元の洗い出し→共通理解
- 授業案の作成→実践

③国際理解教育／開発教育を継続的に推進するための学校運営、教職員育成・研修等（次の世代にどのようにバトンをつなぐか？という視点も含めて書いてください）

- 教師の研修
- 個人の研究テーマの設定とそれに伴う個人研究の奨励と共通理解→次年度の活動について考える。
- 外部研修の案内を確実に行う。

3. 年度内および次年度の業務において、国際理解教育/開発教育推進のために自分が取り組みたいことを3つ挙げてください。（所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定、ほかの教職員への研修参加の後押しなど）

- 所属校の校内研修においてカンボジアでの海外研修で得た学びやJICAの活動についての情報を共有する。
また、JICAの研修に興味がある先生がいたら、研修への参加を後押しする。

- ESD教育やSDGsの視点を取り入れた総合の時間の系統だったカリキュラム作成や授業の企画
- オンラインでつながる。(スバイリエンの中学生と本校の生徒をオンラインでつなげ、英語で会話させながら、お互いの文化を知る)

4. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク（国際協力推進員）や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか？主な3つを挙げてください。

- JICA国際協力出前講座
- 地域が抱える課題を話し合う時間を地域の方と持ちたい。(地域も大事にしたい)
- JICA関西かJICA地球ひろばへの校外学習

5. 本研修を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容（報告会など）。

- 所属校において、校内研修で「海外研修での気づきと学びと今後やりたいこと」についてプレゼンをした。
- 田辺市の教育長に、研修の報告をした。

6. その他所感（研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか？どのような教育の場を作っていきたいか？など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。）

「いつか世界を変える力になる」というJICAのポスターのフレーズがとても素敵で、心に残っていた。海外研修に参加する前は、世界のために行動を開始する日を「いつか」と思っていたが、海外研修を経て、考えが変わった。

「いつか」はすぐに完璧なものは創れないかもしれないけれど、今、目の前にある課題を解決するために、今できることを行動し続けた先に「いつか」世界が変わっているに違いない、だから今できることを行動しようというメッセージなのかもしれないと思った。

今回の海外研修で、この目で見たり、感じたりして、様々なことを知り、巻き込まれることのうれしさを感じたり、当事者意識が芽生えた。だから、私も生徒や先生たちに知らせるだけで終わらずに、どうしたら当事者意識を持ってもらえるか、どうしたらグローバルシチズンシップの一員になってもらえるか考えて行動していきたい。

また、管理職として、自分一人が国際理解教育を推進するのではなく、一人ずつでも仲間を増やしていきたい。「いつか」一人一人の意識が変わり、隣の人を大事にしたり、環境を大事にしたりと、より良い世界にするために行動できる生徒を育成する教師集団を創っていきたい。

この学び多き、よい研修の場を与えてくださったJICAさんに感謝します。ありがとうございました。

氏名	所属	職名	担当業務
藤田 有記	東広島市立木谷小学校	教頭	

1. 本研修を通して、「今、この時代に、学校教育において国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

今回カンボジアに行き、たくさんの日本人が熱い思いをもって、治水や教育の課題解決の取り組み、アートで社会問題を解決しようとする取り組みなど、カンボジアが抱える課題に全力で取り組んでいることを知った。また、この国の実態に合わせ、現地の人とその実態に合わせ、柔軟に協働して取り組んでいた。治水課題に取り組んでいた方に、「このプロジェクトでうれしかったことは何ですか。」と尋ねると、「交渉が成立し、これでこの国のたくさんの人に水を供給することができると思うと、本当にうれしかった。」とその時の感動を思い出し、涙ぐんでいらっしまったことが、その思い入れの深さを感じ、特に印象深く残っている。どの方も、熱い思いを持ち、「誰かのために」自分の持っている技術や指導力を注ぎ、たくさんのカンボジアの人の幸せを願い、改善をすることで自分自身もとても幸せを感じていることが分かった。このようにカンボジアの人の幸せを願って、熱い思いを持って動かれていることに、私自身も感動した。

この地球は、様々な国の人たちが住んでおり、互いに助け合って生きている。地球温暖化・自然災害の増加・海洋プラスチック問題、環境問題など、このような大きな課題は自国だけの課題ではなく、他国と協働し地球規模での解決が求められる。日本での最近の社会情勢を見ても、輸出入以外に労働力として身近に外国人労働者をたくさん見かけるようになり、介護施設や地方の工場、コンビニ等様々な場所で働き、日本の経済を大きく支えている。これからの社会の産業・経済を考えてもこれからの予測不可能な時代は、他国との協働なしでは自国は成り立たないと言える。このような時代を生きる子どもたちに、他国を知り、互いの違いを認め、協働することの大切さを学校教育を通じて、国際理解教育や開発教育を進めていくことが私たちの使命であると考えている。地球規模での課題を抱えている時代を生きる現代の子どもたちにとって、国際理解教育/開発教育はこれからますます大切であると感じている。そして、地球規模の課題、貧困や教育の機会均等の課題に解決しようとしている人がいることを知ることは、今または将来できることは何かを考え、他国と協働して行動できる人物になろうとする態度を育てることにつながり、とても重要だと考えている。

2. 本研修を踏まえて、これからの学校経営方針やビジョン（教育目標、目指す学校像、児童・生徒・教員像等）に国際理解教育や開発教育をどのように統合できそうか、お書きください。教育行政の場合は、各自治体が設定している教育基本計画や方針の達成に向けて、国際理解教育/開発教育がどのように貢献できるかという視点で書いてください。

①学校経営方針・ビジョンにおいて、国際理解教育／開発教育をどのように位置づけるか。

- カリキュラム見直し、国際理解教育／開発教育を計画的に位置づける。
- 教科横断的に、単元をつないで国際理解教育／開発教育の関連性を見えるようにする。
- 目指す子ども像「団結力」（思い合う）の項目で、国際理解教育の内容を位置づける。

②学校経営目標やビジョンを達成するための国際理解教育／開発教育の取り組み（行事、授業、課外活動など）

- 各学年が、国際理解教育／開発教育の視点を持ち、各教科、総合的な学習の時間、道徳を通して、計画的に取り組む。

- 6年生にJICA教材を使って、社会科の授業をすることを位置づける。
- JICAの国際協力出前講座を位置づける。
- 社会科見学に、JICA中国への訪問を計画する。

③ 国際理解教育／開発教育を継続的に推進するための学校運営、教職員育成・研修等（次の世代にどのようにバトンをつなぐか？という視点も含めて書いてください）

- 教員に海外研修（JICA等）をすすめる。
- 職員に研修し、国際理解教育／開発教育の視点を持つことの大切さを伝える。
- 市の教頭会で、カンボジアの訪問の報告と同時に、これからの教育活動において、管理職として国際理解教育／開発教育の視点を持って学校経営することの大切さを伝える。

3. 年度内および次年度の業務において、国際理解教育/開発教育推進のために自分が取り組みたいことを3つ挙げてください。（所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定、ほかの教職員への研修参加の後押しなど）

- 教員に夏のJICA教師海外研修を勧める。
- 5・6年生に国際理解教育/開発教育推進の授業をする。
- カンボジアとオンライン交流をする。（教職員に参観してもらう。）

4. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク（国際協力推進員）や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか？主な3つを挙げてください。

- アジア（カンボジア）の文化の紹介コーナーの設置
- 市内の先生方、小学生にJICA施設でできることの紹介
- JICA6年教材を県内の先生方に宣伝する。

5. 本研修を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容（報告会など）。

- 教職員に1月24日（水）のJICA海外研修（教育行政コース）報告会を宣伝し、職員室モニターにて視聴。
- 職員にカンボジアの報告会の実施予定
- 児童（5年生1回）（6年生1回）にカンボジアを紹介する授業を行った。
- カンボジアの小学校とのオンライン交流をした。

〈カンボジアの小学校とのオンライン交流〉

①クラチェ州クラコー小学校6年生とオンライン

文化交流授業

- ・木谷小学校6年生：篠笛の演奏と日本の遊び（折り紙・こま・お手玉・けん玉）を紹介
- ・クラコー小学校6年生：鍵盤ハーモニカでカンボジアの国歌と君が代の演奏



画面越しに篠笛の演奏をする6年生

②スパイリエンヌワット小学校5年生とオンライン

外国語科交流授業

- ・木谷小学校5年生（5名）：リコーダーの演奏、広島（お好み焼き・もみじまんじゅう・牡蠣・じゃがいも・風あげ）の英語で紹介と英語での質問
- ・スパイリエンヌワット小学校5年生（100名）：カンボジアの生徒と画面越しに英語で会話



カンボジアの生徒と画面越しに英語で会話

6. その他所感（研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか？どのような教育の場を作っていきたいか？など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。）

今回の研修で、「他国・他人との違いを知ることとはとても大切!」と感じるようになった。それは、カンボジアの言葉や文化、子どもたちの屈託のない笑顔や素直さ、先生方の働き方、学校の掃除事情、子どもたちの礼儀正しさ、バイクで通学する中高生など、日本とのたくさんの違いに気が付き、自分自身が非常におもしろいと感じた。実際に聞いて、見て「へえー!」と違いを知り、とても驚き、ワクワクした。もっともっと違いを知りたいと思った。実際にカンボジアの高校生との交流の時間に、高校生から日本の学生についてたくさんの質問を受けた。カンボジアの高校生も日本の高校生に大変興味を持ち、違いを知ることを楽しんでいるようだった。このように、もっと互いの違いについて知りたいと思うこと、それはとても大事な感覚であると感じた。その違いを面白いと感じることが、国際理解教育/開発教育につながる第一歩の入り口であると思う。子どもたちにも、自国と他国の違いを知り、まずはそれを面白いと感じてほしい。その違いを知り、受け入れることで、多様性が広がったり、価値観が変わったり、柔軟に対応できたりすることにつながる。また、その違いを受け入れるという感覚は、他人同士、友達との関係にも影響を与えるに違いない。金子みすゞの「みんなちがって、みんないい。」につながる感覚である。学校内でも、地域内でも、自国、他国でも同じである。「人はみんな違う。違うから楽しい!もっと知りたい!」そして、「違うから違う立場での意見を聞きたい。違いを知る中で、もし困っていたら助けたい。」と思うのではないかな。その感覚をたくさん子どもたちも身に付けてもらいたいと思う。

そして、国際理解教育/開発教育の「きっかけ」の種を植えるのは、もちろん教育者である私たちである。そして、その「きっかけ」から、子どもたち自身が世界にどんどん興味を持ち、広い視野で考え、様々な人と協働しようと思う人になってほしいと思う。また、地球の課題を知り、その課題を解決しようと行動する態度を身に付けられる人になってほしい。たくさんの「きっかけ」の種を植えられよう教育を行えるように、またそんな思いをもった教職員をたくさん増やしていけるように私自身、周りを少しずつ巻き込みながら、これからも国際理解教育/開発教育に積極的に取り組んでいきたい。



ファシリテーター所感

ファシリテーター所感

JICA教師海外研修(教育行政コース)は、スクールリーダーとして学校経営に関わる方、教育行政で学校教育のマネジメントに関わる方を対象とした研修です。本研修の実施において、ファシリテーターとして、以下の視点を大切にしながら研修の運営に関わりました。

- 参加者が国際協力現場を訪問することにより、国際理解教育・開発教育の重要性を自ら体感し、個々の教育観や育成すべき児童・生徒像に国際理解教育・開発教育の視点が入るような機会にすること。
- 参加者が、国際理解教育・開発教育の推進に向けた短期、中期、長期的な戦略や具体的なアイデアを持って研修を終えること。
- 本研修の終了後に、参加者がそれぞれの地域や校種、立場等を踏まえつつ、学校内で、地域内で国際理解教育/開発教育を推進し広めるための中核的人物となっていくこと。

国際協力・国際理解に関する学びはSDGsと同じく、児童・生徒が授業で「知る」ことだけではなく、世界で起きていることが自分たちとどのようにつながっているのか、そこから何を感じ、自分たちは何ができるのか、どうしたら「誰も取り残さない」社会を実現できるのかという、理念や視点を問う一連の学びの活動です。

この研修の参加者層を踏まえたとき重要になってくるのは、学習活動に国際理解や国際協力の視点や体験を授業に取り入れるということだけではなく、学校教育全体を俯瞰した形でどのように日々の教育活動に組み入れるか、変わりゆく社会・世界に合わせて子どもたちの学びや視野をどのように広げていくかといった、ビジョンやマネジメントに関わるものです。このことから、ファシリテーターとして事前研修から海外研修、事後研修を通じて、参加者が国際理解教育/開発教育推進の担い手意識を持ったリーダーシップの視点や、地域・校内で推進の取り組みを実現するためのマネジメントの視点、あるいは行政の立場としてどのような制度的支援ができるかという視点からの問いかけをしました。その中で、どのように国際理解や国際協力の視点を当たり前化できるのかを一緒に模索していきました。

「開発途上国は貧しいままというステレオタイプのイメージを持っていたけど、イメージと全く異なるような世界が広がっていた。知っているつもりでも実は知らない。世界はこんなに変わっているのだから、私たち管理職や行政が自らアップデートする必要がある。」

「こんなにも熱い思いや志を持った人が日本を飛び出して、カンボジアで働いている。現地の人に寄り添い、彼らに任せながらサポートしている。」

「人は人に会って刺激を受けるということはあるけど、それを自分の成長や社会への貢献につなげていく。こうした視点は自分にはなかった。」

こうした言葉が、カンボジアで行った毎日の振り返りの中で参加者から紡がれていきました。国際理解や国際協力のフィールド(現場)を訪問し、そこで出会う人たちから、彼らの仕事や地域への思いを聞き刺激を受けるといった、国際理解教育/開発教育の重要性を感じる原体験となるような訪問や出会いがたくさんありました。

一方で、個々の充実した経験や認識したその重要性を踏まえて、国際理解教育/開発教育の推進のために、周囲を巻き込んでいくにはどうしたらいいかというのは別の段階の話です。カンボジアの研修では、日々の振り返りに加え「自分たちが体験している充実した学びをどうやって学校や地域に届けられるだろうか」という視点の問いかけを定期的にして、対話を重ねていきました。

「国際理解教育や開発教育というのは、海外経験がある、英語ができるから担当するのではなく、経験やスキルがなくても、自らも知りたい、学びたいといった、児童・生徒と一緒に学ぶ視点で誰でも関わっていく形がいいと思う。」

「教科中心の文化はあるけれども、それぞれの教科には国際理解につながる話がある。どの授業でどんなことができるかというようなことを示せば、意外と身近に材料となるものはある。」

「働き方改革の流れではあるけれども、職員室内での対話の機会を減らすべきではない。」

「授業の中でもキャリア教育のイベントなどでも、ALTをはじめとした身近な人材を活用するだけでも世界に興味を持つきっかけを作ることができる。」

「(管理職である)自分が楽しそうに、世界とつながっている姿や、自らが学びにいく姿勢や背中を見せることで、他の人の学んでみようという気持ちの後押しになると思う。」

国際理解教育/開発教育をどのように推進できるかという問いには、唯一の明確な答えはありません。しかし、この研修では参加者は対話を通して、それぞれが自分のやりたいこととできることを出し合い、それらを合わせた形でこれからのアクションやビジョンにつなげて考えを膨らませていきました。

本研修の参加者は、すでに、あるいは将来的にスクールリーダーとして活躍している方々です。それぞれが学校や地域をリードする立場となり、作りたい学校や地域のビジョンを描く時、「世界を理解し、つながり、助け合う」という視点は必ず入るものと確信しています。短期的にできるアクションとともに、近い将来そうしたビジョンが体现できる学校が日本全国に増えることを楽しみにしています。

一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)
理事・GiFTダイバーシティファシリテーター
木村 大輔



付録

教育関係者の皆様へ

国際理解教育／開発教育のための プログラム案内



付
録

VII



1 JICA国際協力エッセイコンテスト

2 国際協力出前講座

3 教員向け研修・セミナー

4 国際理解教育／開発教育のための教材

5 JICA地球ひろば訪問

独立行政法人 国際協力機構

世界のことを考えるきっかけに!

1 JICA 国際協力エッセイコンテスト

対 象: 中学生・高校生
募集期間: 6月～9月上旬 結果発表: 12月下旬**活用法** □ 夏休みの課題 □ 作文指導、小論文対策 □ 授業、特別活動、深求学習 □ 出前講座の事後学習**学校で習ったことやニュースで聞いたこと、
自分の体験から感じたことをエッセイで伝えよう!**

JICAでは、開発途上国の現状や国際協力の必要性について理解を深め、自分たち一人一人に何ができるのかを考えることを目的に、中学生・高校生を対象としたエッセイコンテストを毎年実施しています。上位入賞者には、途上国で国際協力の現場を視察したり、現地での生活を体験できる海外研修が贈られます。夏休みの宿題や作文指導としてもご活用ください。

後 援: 外務省、文部科学省、各都道府県教育委員会、
日本私立中学高等学校連合会など

詳しくはコチラ JICA エッセイコンテスト 検索

一人一人が小さな行動を起こして
いくことで誰もが住みやすい街が
世界に増えていくと思う。
中学2年(受賞時) 山田桜来身近な生活の中に沢山ある
「ちょっと地球に優しい行動」を
心がけるようにしていきたい。
高校2年(受賞時) 久保日向太上位入賞者は、
海外研修の参加や
フェアトレード商品を贈呈!
応募者全員に参加賞、多数の作品を
応募いただいた学校には学校賞を
お贈りします。

海外研修の様子(マレーシア)

いつもの教室で、世界を体験してきた講師と学ぶ!

2 国際協力出前講座

開発途上国の現場で国際協力に携わったJICAの関係者を講師として学校や地域などに派遣し、国際理解教育/開発教育にお役立ていただいています。現場で活躍した人材だからこそ
の貴重な体験談をお届けし、受講者の質問にお答えします。ご希望のテーマに合わせた講座
内容を組み立てます。



国際協力出前講座

申込方法

1ヶ月前
までに
申込み全国のJICA国内拠点、または各県の国
際協力推進員(JICAデスク)にお問合せ
ください。申込書の
送付

申込書は JICA国内拠点ホームページから

JICA 国内拠点

検索

活 用 法

- ☐ 総合的な学習の時間
- ☐ 道徳
- ☐ キャリア教育(国際協力の仕事とは)
- ☐ テーマ学習(文化祭や修学旅行の事前学習など)
- ☐ 教員研修・PTA講習会 など

内 容

ご希望のテーマや内容に応じて、
講師を紹介します!

- 開発途上国の文化や生活を知る
- 開発途上国の暮らしから自分たちの生活を見つめなおす
- 国際協力を通して自分の生き方を考える
- SDGsについて学ぶ

対 象

小学生～一般

実施日・場所

実施日、時間ともご希望により調整可能です。
オンラインでの実施は要相談

費 用

講師への謝金と交通費のご負担を
お願いします。謝金の目安は講師1人
1時間あたりおよそ5,000円です。
詳しくはご相談ください。

世界を学ぶ授業づくりに!

3 教員向け研修・セミナー

● 教員向け国内研修

JICA国内拠点では、国際理解教育/開発教育に興味関心のある先生方を対象に地域に特化した研修を実施しています。

詳しくはコチラ JICA 教員研修 検索

● 教師海外研修

国際理解教育/開発教育に関心を持つ先生方を対象に、開発途上国を訪問して研修を実施しています。
研修後はその経験をもとに教材作成や授業実践を行います。
(一般教員向けコースと行政関係者および学校管理職向けコースがあります。)

詳しくはコチラ JICA 教師海外研修 検索

● 開発教育セミナー

JICA国内拠点および地球ひろばでは国際理解教育/開発教育に関する各種セミナーを実施しています。

詳しくはコチラ JICA 開発教育セミナー 検索

● 国際理解教育/開発教育指導者研修

国際理解教育/開発教育への興味・関心の高い先生方を対象に指導案作成・授業実践の更なるレベルアップに取組めます。研修後は国際理解教育/開発教育の推進のリーダーとして取り組んでいただくことを目指します。

詳しくはコチラ JICA 指導者研修 検索



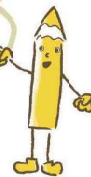
教材で学びを広げ、理解を深める!

4 国際理解教育／開発教育のための教材

JICAでは、国際理解教育／開発教育や総合的な学習の時間に役立つ教材を作成し、無料で提供しています。国際協力や地球規模の課題をテーマにした教材を、授業に合わせてご活用ください。

詳しくはコチラ [JICA 教材](#) [検索](#)

教材は、
JICA地球ひろばの
ホームページでも
ダウンロードする
ことができます。



映像教材



公益財団法人消費者教育支援センター 主催
消費者教育教材開発表彰2021
内閣府特命担当大臣賞

映像 小中高生向け／先生・教育関係者向け 世界につながる教室

ルワンダを舞台に「水と世界」「国際協力」が学べる映像教材です。2分～5分の短い映像なので、使い方・組み合わせは自由です。アクティブラーニング用の教材としてそのまま活用できます。授業で使うヒントも収録されています。

ルワンダ村落部に暮らす
ダニエリ君の一日



映像 パワーポイント 小中高生向け 地球ナビ

「地球ナビ」はSDGsの各ゴールについて、JICAの取組みも紹介しながら、データ、写真、クイズなどを駆使して分かりやすくまとめた動画コンテンツです。JICA地球ひろば1階にある体験ゾーンでは、大型スクリーンで楽しみながら学べます。



冊子教材



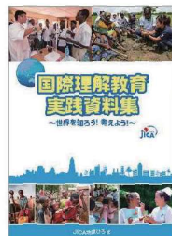
冊子 小中学生向け 共につくる 私たちの未来

学習指導要領にもある「持続可能な社会の創り手」の育成を見据え、子供たちの生きる力を育むために、JICAの国際協力を切り口にSDGsの取組みをまとめた教材です。



冊子 小中高生向け つながる世界と日本

途上国と日本とのつながり、世界共通の目標「SDGs」や国際協力について、クイズを交えながら分かりやすく紹介しています。「どうなってるの?世界と日本」のリニューアル版です。



冊子 教員向け 国際理解教育実践資料集

授業ですぐに活用できるよう、地球の現状や気候変動、需給バランスなどの諸問題に関する資料(データ、写真など)をまとめました。アフリカと自分たちのつながりや、教育の意味を考えさせるワーク案も掲載しています。



冊子 小中高生向け ぼくら地球調査隊

環境、保健、教育、食料、水問題など、私たちの身近に迫っている地球規模の課題について、マンガを読みながら学ぶことができます。

先生・生徒のお役立ちサイト



JICAでは、国際理解教育／開発教育の実践や授業で活用できる教材・素材等、様々な情報を提供する「先生・生徒のお役立ちサイト」を立ち上げました。学校で活用できる(生徒・教員向け)JICA開発教育支援プログラムも紹介しています。是非、ご利用ください。

詳しくはコチラ [JICA 先生・生徒のお役立ち](#) [検索](#)



JICA 地球ひろば(東京・市ヶ谷)で、世界を体験!

5 JICA 地球ひろば訪問

JICA 地球ひろばでは、開発途上国の暮らしの現状や、地球が抱える課題、国際協力の実情などを、見て・聞いて・さわって体験できる展示と、途上国での活動体験談や開発教育教材を使った参加型学習(グループワーク)を組み合わせたプログラムを実施しています。

修学旅行や社会科見学、総合学習等で、ぜひご利用ください!

プログラム例 120分

※プログラム時間と内容についてはご相談ください。

40分
・体験ゾーン見学
(探検シートをもとに館内を見学)

20分

・JICA の事業や日本の国際協力について説明



50分

・国際協力(青年海外協力隊等)の体験談または参加型学習(グループワーク)



10分

アンケート記入



ここに注目!

地球案内人

開発途上国で活動した経験を持つ地球案内人が、展示を分かりやすくご案内します。

※体験ゾーンの展示は4ヶ月に1回程度更新されます。

入場無料

団体訪問は要予約

活用法

- ☐ 社会科見学
- ☐ テーマ学習
- ☐ 修学旅行
- ☐ 教員研修 など

内容

ご希望のテーマや内容に応じて、プログラム内容を組み立てます!

- 体験ゾーンの見学
- JICA と日本の国際協力について
- 国際協力(青年海外協力隊等)の体験談
- 地球体験学習
※テーマ環境や命など
- 食事を通じた異文化理解

事前事後学習もご相談ください。

対象

小学校高学年 ~ 一般

人数

1名~80名程度

※団体での見学プログラムは要予約

実施日

通年 月曜日~日曜日
(第1・3日曜日、JICA 地球ひろばの休館日を除く)

費用

無 料

JICA 地球ひろば訪問

申込方法

1ヶ月前までに
電話で予約

希望日時、訪問者人数、希望内容等をお伝えください。予約状況は、JICA 地球ひろばホームページの「訪問カレンダー」で確認できます。

地球案内デスク直通フリーダイヤル

0120-76-7278 (TEL: 03-3269-9090)

申込書の送付

申込書は JICA 地球ひろばホームページから

JICA 地球ひろば 訪問 検索

FAX または Eメールで送付してください。

FAX: 03-3269-3419 chikyuhiroba@jica.go.jp

JICA 地球ひろば

市民参加協力事業(開発教育支援等)の全国拠点として、国際協力に関心のある皆さまを応援するさまざまな事業を実施しています。

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5

☎ 代表番号 03-3269-2911

✉ 地球ひろば推進課 mptgp@jica.go.jp

● 開館時間

体験ゾーン: 平日・土日祝 10:00~18:00
定休日 第1・3日曜日、年末年始

交流ゾーン: 9:00~21:30 定休日 年末年始

J's Cafe: 平日 11:30~14:00
定休日 日曜日、祝日、年末年始
(土曜日の営業はHPをご確認ください)

JICA 図書館: 事前予約制
定休日 土日祝日、館内整理日(各月最終平日)、年末年始



※団体訪問等での駐車場の利用についてはお問合せください。

JICA のメールマガジンに登録しよう!

■ JICA 地球ひろばメルマガ
JICA 地球ひろばや関東近郊のイベント情報などを隔週火曜日に配信しています。



■ 開発教育メルマガ
国際理解教育/開発教育の推進に向けて、実践に役立つ情報を配信しています。



Twitter、Facebook、YouTube でも最新情報を配信中!



JICA国際協力 中学生・高校生エッセイコンテスト



言葉にすれば、
世界を動かす力
になる。

Photo : JICA / Seiji Shinohara

募集期間：毎年6月上旬～9月上旬 郵送・オンラインどちらでも応募OK！

入賞発表：12月下旬 JICA HPにて

文字数： 中学生の部 本文1,200文字以内
高校生の部 本文1,600文字以内

詳細はこちら



3つのポイント

- 1 SDG s ・探究学習のアウトプットに！
- 2 海外研修等の副賞、参加賞あり！
- 3 入賞経験を活かし総合型選抜・推薦入試に出願！

JICA国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト

学校での活用事例



副賞の海外研修（2021年/マレーシア）

1 総合的な学習(探究)の時間で活用！

～地域や世界の課題、SDGsを学び、考える～



- ① 外部団体と連携し、ボランティア活動等に参加し「体験」する
- ② 体験を通して「感じたこと」「気づいたこと」「やってみたいこと」を整理し「気づきを得る」
- ③ 学んだことや周囲に伝えたいことをJICAエッセイコンテストで自分の言葉で「表現する」



出前講座

2 社会科の地理的分野(中学校)、 地理総合(高等学校)の授業で活用！



- ① 世界の諸地域の特色や課題を学ぶ
- ② 知識を活用してテーマについて話し合う
- ③ 言葉にして表現し、JICAエッセイコンテストへ応募

過去のテーマ

地球に生きる私たち
～ 未来へつなげるために ～

世界とつながる私たち
～ 未来のための小さな一歩 ～

私たちと地球の新しい未来

3 学校の図書館、JICA出前講座を活用した学び



- ① JICA国際協力出前講座で現地の話を聞く
- ② 図書館に「夏季課題JICAエッセイコンテストコーナー」を設置し生徒が手に取って見やすい環境づくり
- ③ エッセイ書き方ガイド～実践ワークシート～を配布し各自で活用
- ④ 生徒が書いたものをそのまま応募も可能（校内選考不要！）

栄養士協力のもと、「国際週間」として給食で
海外料理を再現した学校も！



JICA情報はこちら！



教材を探す
(ワークシートあり！)



出前講座



地球ひろば



国際キャリア総合情報サイト
JICA PARTNER



〔発行〕

独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 広報部 地球ひろば推進課

TEL : 03-3269-9022

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5 JICA市ヶ谷ビル

〔編集〕

JICA地球ひろば - 教員向け研修運営事務局

一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)

TEL : 03-4577-6767

Email : jica-edu@j-gift.org

〒141-0021 東京都品川区上大崎2-15-19 MG目黒駅前ビル2階

〔発行〕 2024年3月